

江戸の地霊・東京の地縁

鉄砲洲「福井家文書」に関するメモランダム

塩崎文雄 所員／表現学部教授

——はじめに

これから紹介するのは、東京都中央区湊一丁目（俚俗：鉄砲洲、旧：東京市京橋区本湊町）に三代にわたって住み慣わしてきた福井家に収蔵されてきた文書と、そこから導き出される福井家の人びとのくらしと文化の様態である。福井家から寄託をうけたおよそ2,000点あまりの文書に目を通したところ、おおむね1910年前後から1980年ごろまでの史料であることが判明した。プライバシーへの配慮も必要だし、半世紀という区切りの良さもあるから、調査対象をひとまず1910～60年の約1,500点に特定したい。

夢想しているのは、河盛好蔵訳の『フランス革命下の一市民の日記』¹⁾ や喜安朗『パリの聖月曜日』²⁾ 良知力『青きドナウの乱痴気』³⁾ などのこころみと、小木新造の『東京庶民生活史研究』⁴⁾ の達成とを足して二で割ったような仕事である。こうした作業を通して、関東大震災と戦災というふたつの災禍に遭遇したり、潜りぬけてきたりした鉄砲洲の街と、そこに暮らしてきた無名の一市民のくらし向きと生活文化を浮き彫りにしたいのである。

なお、本報告は和光大学総合文化研究所のプロジェクト「東京一市民の暮らしと文化」（2010年度）の成果の一部である。その際、プロジェクト名を〈京橋区民〉や〈東京都民〉としないで〈東京市民〉としたのは、行政区分による位置づけでは必ずしも包摂しきれない、生きた〈市民〉のくらしと文化の総体を掬いとりたいと企図したからである。

- 1) セレストアン・ギタール著／レイモン・オベール編／河盛好蔵監訳『フランス革命下の一市民の日記』中央公論社、1980.2（のち中公文庫、1986）
- 2) 喜安朗『パリの聖月曜日——19世紀都市騒乱の舞台裏』平凡社、1982.6（のち岩波現代文庫、2008）
- 3) 良知力『青きドナウの乱痴気』平凡社、1985.11（のち平凡社ライブラリー、1993）
- 4) 小木新造『東京庶民生活史研究』日本放送出版協会、1979.11

1 — 震災復興期の仕舞屋建築と福井家家蔵文書と

昨年の夏に、ふとしたことから横浜市在住の鈴木慶伊さん（76歳）というご婦人と知り合いになった。彼女が実家として示されたのが、村岡秀男の『下町残照』⁵⁾に収められた福井家の写真であった〔図1a-b、筆者撮影〕。下見板張り2階建日本家屋の母屋（敷地約261坪、建坪約28坪、床面積56坪）に隣り合って、コンクリート造、スクラッチ・タイル仕上げの3階建の洋館（建坪約17坪、床面積27坪）の備わった家屋は、一目見て、震災復興期に建てられた仕舞屋と見てとれた。のちに『中央区の文化財（七）——建造物』⁶⁾にも、この建物が27棟の「居住施設」のひとつとして採録されているのを知ることになる〔図2〕。

それはともかく、長らく東京の町々を散策するのを趣味としながらも、これといった伝手のない身には、興味をそそられる民家に出くわしても、外観だけを見てすぎることはできなかつた。だから、このたびのめぐり合わせに小躍りし、鈴木さんにねだって、福井家を訪れたのは2009年8月はじめのことであった。

当主福井隆之・勝子夫妻のご厚意によって、家屋の内外を隈なく見せていただいた。何より驚かされたのは、オフィスを兼ねた3階建洋館の入口という入口、窓という窓のすべてに、鉄製の防火シャッターが取り付けられていたことである。かてて加えて、土蔵代わりの地下室まで備わっていた。ここには関東大震災の教訓が忠実に生かさ



図1a 福井家外観（2010.11撮影）



図1b 同上



図2 福井家間取り図（『中央区の文化財（七）』による）

5) 村岡秀男『下町残照』朝日新聞社、1988.4

6) 『中央区の文化財（七）——建造物』中央区教育委員会、1988.3

『中央区の木造建築物 中央区文化財調査報告集2』中央区教育委員会、1993.3

れている。被服廠跡の惨禍を引き合いに出すまでもなく、震災直後には被害の実態をふまえて「大震災」の語よりも「大震火災」の語が流通していたことにも端的にうかがわれるように、防火対策こそが喫緊の課題だったからである。

それに比べて下見板張り書院造り（武者隠しもある）の日本家屋の方は、震災前の都市中間層のスタンダードな建築様式を踏襲していて、一見、きわめて無防備に見える。しかし、街角に立って福井家の立地条件に目をこらせば、その答はすぐに返ってくる。福井家は震災復興期に整備された南北（幅員15m）および東西（同12m）に走る街路が交叉する角地にある。その上、高い築地塀に囲まれている。しかも、西隣には復興小学校のひとつである鉄砲洲小学校（のち中央小学校。敷地約1,015坪。1928年落成、2010年取り壊し）⁷⁾の鉄筋3階建校舎と、復興計画小公園「鉄砲洲公園」（敷地約884坪。1930年竣工）⁸⁾とを控えている。北には幾棟かの民家を隔てて、これまたRC構造の鉄砲洲稲荷神社（敷地約425坪。1935年再建）がある [図3]。西側および南側、さらにはいくらか不安は残るものの北側も含めて、三方からの類焼のおそれはない、とひとまず考えてよい。だからこそ、敷地の東半分に母屋を抱きかかえるようにしてコンクリート造、スクラッチ・タイル仕上げの洋館を建てて、防火擁壁にしていると見てとれるのである。



図3 昭和7～11年火保図
（中央区沿革図集 京橋篇）より

こうした建物配置は、むろん、偶然の所産などではない。それというのも、『帝都復興区画整理誌』⁹⁾や『帝都復興事業誌 土地区画整理篇』¹⁰⁾『復興区画整理委員会名鑑』¹¹⁾などにみられるように、震災復興期に当主だった福井久信は「第21地区」とナンバリングされたこの地区の委員のひとりとして、区画整理事業に関与していたからである。大震火災によって焦土と化したこの地域にあたな町割を施すにあたって、自家の占める位置をあらかじめ知りつくしていたばかりか、有利な区画を占有できるポストにいたるのである。

こうした建物配置は、むろん、偶然の所産などではない。それというのも、『帝都復興区画整理誌』⁹⁾や『帝都復興事業誌 土地区画整理篇』¹⁰⁾『復興区画整理委員会名鑑』¹¹⁾などにみられるように、震災復興期に当主だった福井久信は「第21地区」とナンバリングされたこの地区の委員のひとりとして、区画整理事業に関与していたからである。大震火災によって焦土と化したこの地域にあたな町割を施すにあたって、自家の占める位置をあらかじめ知りつくしていたばかりか、有利な区画を占有できるポストにいたるのである。

7) 『鉄砲洲百年——鉄砲洲小学校・幼稚園 開校百年・開園四十五年記念誌』1977.4

8) 『帝都復興事業誌 建築篇・公園篇』復興事務局、1931.3

9) 『帝都復興区画整理誌』第三編 各説 第一巻、東京市役所、1931.10

10) 『帝都復興事業誌 土地区画整理篇』復興事務局、1931.3

11) 『復興記念 区画整理委員会名鑑』日本聯合通信社、1926.11

東京都中央区湊一丁目にある福井家は、東京のまんなかにもありながらも、震災復興期の民家（1927年築）が80年あまりの歳月を経、戦災もバブル期の地上げ攻勢も潜りぬけて現存している。その後の改築も最小限度にとどめられており、当初のおもかげを色濃く残している。それを取り囲む借家群（元の家主は福井氏）のたたずまいも記録するに価する。近隣の街並みも含めて、貴重な文化遺産である。写真や図面として記録しておくべきであろう。

福井家を訪ねたおり、いまひとつ目にとまったのが、大きな金庫であった。洋館応接間に、母屋側から埋めこまれている。母屋の縁側のつきあたりにも、もうひとつあった。そこで甘えついでに、収蔵品を見せていただけないかとお願いしたところ、はじめに記したごとく、それらの文書をそっくりそのまま和光大学総合文化研究所に寄託していただけることになった〔図4a-b〕。目下、2,000点にもよる文書のデータベース化に取り組んでいる最中である。

史料のうち主立ったものは、福井新助・久信・隆之三代にわたる土地・家屋の図面および権利書である。売買契約書、貸地・貸家契約書、家賃簿、さらにはそれらの所有権や居住権、家賃滞納などをめぐる種々の係争書類のたぐいもある。預・貯金通帳、有価証券（軍事国債など）、火災保険証書、納税申告書、課税通知書なども数多く含まれている。質商として出発した福井家が、関東大震災後、主として貸地・貸家業を営んできたことは、これらの史料によって知ることができる。しかも、それらの貸地・貸家群は鉄砲洲界隈にあったばかりではない。本八丁堀、南新堀、佃島など、京橋区全域に点在していた。さらには区域を越えて、早稲田鶴巻町や戸山町、麻布こうがい 斧町などの市内各所に散在していたさまを見てとることができるのである。

二代目当主の久信は、このほか筆めだっらしい。寄託文書のなかには、持家群の震災被害状況を克明に記した「大正十二年分第三種所得税減免申請（控）」なる書類がある。また、家屋の修復工事の進みぐあいや入費の一部始終をメモした「普請入費控（一）」



図4a 福井家文書



図4b 同上

附雇員月給控 大正拾貳年九月ヨリ大正拾四年十二月末日迄」や「川崎銀行京橋支店当座勘定」(1923年9月末日から1932年12月まで)などのノートもある。さらには、京橋税務署の調べに応じ、1934年度(昭和9)所得税の申告額が2万28円(33年度は2万2850円)に内定した旨の手控(1934.10.13付)の類も残されている。これらの史料をつぶさに点検すれば、関東大震災に遭った同家が、災害からどのように立ち直っていったかを知ることができる。あるいは福井家の人びとが、その後に訪れた昭和モダニズム期の都市生活をいかにエンジョイしたかを明らかにすることもできるはずである。

文書のなかには「誕生記録」と題した綴りもある。三男五女の出生のたびごとに、母子の健康状態や、かかりつけの医院、産婆、看護婦たちへの謝礼、お七夜・初節句の祝い膳、鉄砲洲稻荷社への宮参りの次第などをこと細かに書きとめたものである。親族や借家人、町内の人びと、青年団からの／への、三越・松屋・白木屋・美松などを通しての産着や袱紗、鯉節商品切手、翁堂・青柳・森永・オリンピックなどの和洋菓子店を介しての鳥の子餅、スアマなどのやりとりが記録されている。ここからは、出産と育児にちなんだ習俗のみにとどまらず、都市中間層の消費行動の片鱗をうかがうことができる。さらには、江戸伝来の氏子・檀家制度に代わって、やがて訪れる総動員体制を下支えすることになるはずの隣保組織や青年団組織の編成のプロセスを読みとることができるようである。

このついでに触れておけば、次節に述べる秋葉隆・蔵子(久信の義姉)一家との付き合いや、秋葉隆の京城帝大への赴任の時期についても、内祝いを兼ねた饞別に榮太楼の梅干を贈った(1927.4.29)とある記載によって、はじめて知ることができたのである。

それとは別に、1933年(昭和8)5月、福井久信が東横線綱島温泉駅近くの山林4,587坪(約1.5ヘクタール。神奈川県神奈川区北綱島町字北前耕地)を1万7500円で取得した旨の権利書も見いだされる。ブランコや三輪車で遊ぶ子どもたちや、水着姿でポーズをとる久信自身の写真も残されている。だから、子女たちが証言するように、別荘地として手に入れられたものであろう [図5a-b]。熱海の「新玉旅館」での避寒、鎌倉由比ヶ



図5a 階子と隆之・綱島の別荘にて



図5b 久信・綱島の別荘にて

浜の貸別荘での避暑、新富町の料亭「萬安」¹²⁾での年回忌法要、二世芳村五郎治に師事した長唄稽古などとならんで、1930年代の福井家の生活文化の一斑がいかまみられて興味深い。ちなみに、津金澤聰廣監修の『写真で読む 昭和モダンの風景』¹³⁾を繙けば、深窓の令嬢たちの多くがお茶やお花とならんで、長唄稽古を趣味のひとつとして挙げているのに気づかされる。昭和戦前期に、長唄稽古は高尚な趣味として持て囃されていたのである。

久信と京都競馬場¹⁴⁾とのかわりをうかがわせる史料も見いだされる。競馬もまた、ギャンブルとしてよりも、〈紳士の嗜好〉^{たしな}といったステータスを表象する趣味や出資の一環として位置づけるのが当を得ているのだろう。あるいは、震災前の都市中間層のスタンダードな建築様式を踏襲した本湊町の本宅を、ここでもう一度思い起してみるのも便宜だろう。別荘地購入をはじめとする福井久信の趣味生活のありかたを探れば、昭和戦前期の都市中間層の人びとを支配していたスノビズムの様相をあぶり出す端緒が見つかるように思われる。

ところで、東京横浜電鉄神奈川線の綱島温泉駅が開業するのは1926年。翌27年(昭和2)4月には、東横電鉄直営の300平米の温泉浴場が開場した¹⁵⁾。新聞にも「ラヂウム鉱泉」の効用や「近郊の楽境」を売り文句にしたキャッチ・コピーが躍っている。その一方で、電鉄会社の主導による宅地分譲がさかんに行われていた。「坪当り十円より」「拾年賦」(「読売新聞」1929.2.26)「八一坪ヨリ二〇三坪マデ——三区画」「二十九円ヨリ三十五円マデ」(同上1943.11.24)などの広告が紙面をにぎわしているゆえんである。久信の別荘地購入は、自家用レジャー施設としての使いみち以上に、急速に進む都市〈東京〉の西の郊外開発への先行投資の意味合いを兼ねていたのかも知れない。

念のために急いで断っておけば、井上章一の『愛の空間』¹⁶⁾にもいうように、戦後の一時期、綱島温泉は「逆さくらげ(温泉マーク)」のメッカとして喧伝される。だが、当時は鄙びた郊外の保養地だったのである。

総じて、福井家から寄託された史料を丁寧に整理・分析すれば、20世紀初頭から昭和戦前・戦後期にかけて鉄砲洲に住まい、質商や貸地・貸家経営に携わってきた都市中間層の暮らし向きと生活文化の全貌を浮き彫りにすることができるようである。

だが、それらの作業には、なお相当の日子を要する。そこで、ひとまずは福井家を取りまく問題のあれこれをラフ・スケッチし、今後の調査の^{めど}目途をつけてお

12) 松本順吉『東京名物志』公益社、1901.9

13) 津金澤聰廣監修『写真で読む 昭和モダンの風景』柏書房、2006.5

14) 『京都競馬場70年史』日本中央競馬会京都競馬場、1995.9

『京都競馬場80年史』日本中央競馬会京都競馬場、2005.9

15) 『東京急行電鉄50年史』1973.4

16) 井上章一『愛の空間』角川書店、1999.8

きたい。福井家や鉄砲洲の街をめぐる種々の文献を渉猟、吟味し、外壕を埋める作業をあらかじめこころみしておくことは、ひとつには史料の全体像の把握に役立つはずだし、いまひとつには福井家の方がたの過分のご厚志に少しでも酬いることになるはずだからである。

2 —— 松阪家の人びと —— 検事総長とモスリン業者と社会民族学者と

福井一族と、その縁辺につらなる人びとの家系図は〔図6〕のようである。
まずは、福井久信の配偶者階子しなごの姻戚関係のあらましを述べておく。

久信の妻階子の本家松阪家は代々「先春園」のちに「大松園」と称した宇治の製茶商で、小磯内閣の司法大臣松阪広政（1884～1960）を出した。

松阪金三郎の長男広政は、一高、東大を経て検察畑を歩み、検事総長にまで栄達した。さらには、東条英機のあとをうけた小磯国昭のもとで、司法相として「御聖断」にも参画する。そればかりにはとどまらない。共産党の弾圧で知られる3・15事件、陸軍将校の反乱事件2・26事件などに、検察側から関与している。またGHQ占領下の極東軍事裁判では、逆にA級戦犯としてあつかわれた。昭和史の重要な局面に、陰に陽にかかわったということである。ことは『松阪廣政伝』¹⁷⁾に詳しい。

金三郎の弟で、広政の叔父にあたり、階子の父である松阪晴吉（1864～？）は別家して、モスリン友禅業界で活躍する。京都で修業を積んだのち、東京に進出した。浜町、浪花町を経て、1898年（明治31）、江戸このかた商人あきんどの檜舞台とみなされてきた日本橋通油町とおりあぶらちように「松坂晴吉商店」（「いと松坂屋」にあやかっただのか）の暖簾のれんを掲げる。ことは1912年（明治45）の『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地図並びに地籍台帳——日本橋区』¹⁸⁾の通油町8番地（147坪）に「松坂友禅モスリン店」の記載が認められることによっても確かめられる。

松坂晴吉商店のさかんだったさまは、年ごとの『日本全国商工人名録』¹⁹⁾『日本商工営業録』²⁰⁾『東京市商工名鑑』²¹⁾『大日本商工録』²²⁾『東京市商工名鑑』²³⁾

17) 『松阪廣政伝』松阪廣政伝刊行会、1969.11

18) 『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地図並びに地籍台帳——日本橋区』1912（のち『中央区沿革図集 日本橋篇』中央区京橋図書館、1995）

19) 『日本全国商工人名録』商工社、1898、1902、1910、1914、1921、1924、1925年版など。

20) 『日本商工営業録』1898、1900、1902年版など。

21) 『最近 東京市商工名鑑』東京市役所商工課編、地涌学会出版部、1924.9（のち龍溪書舎『近代日本地誌叢書 東京編』27巻、1992）

22) 『大日本商工録』大日本商工会、1925、1930年版など。

23) 『東京市商工名鑑』1933年版、1935、1941年版など。

(とりわけ前三者)などに掲げられた、人目を引く名刺広告によってうかがうことができる。

また、来場者数600万人を数え、夏目漱石の『虞美人草』²⁴⁾にも取りあげられた1907年(明治40)の東京勸業博覧会に出品した「モスリン友禪」(9.5円)は「宮内省御買上品」(総点数107、合計4,999円38銭)の栄に浴した²⁵⁾。ことは「朝日新聞」7月18日の記事に詳しい。さらには、大正天皇の即位を奉祝して開かれた1914年(大正3)の大正博覧会への出展作も金牌を受賞している。もっとも、この栄誉をめぐるのは、審査の不正を鳴らし、晴吉を名指しするクレームがマスコミ(「読売新聞」7.14)にスクープされ、物議を醸したりもする。審査員への鼻薬が効きすぎた反動でもあったろうか。それとは別に、大阪洋反物小売同盟会主催の「全国モスリン友禪競技大会」²⁶⁾にも、出品者として名を連ねている。

晴吉の逸事のなかでもっとも目覚ましいのは、パナマ運河開通を記念して1915年(大正4)にサンフランシスコで開かれたパナマ太平洋万国博覧会に、財界の巨頭渋沢栄一に随行して渡米した²⁷⁾ばかりか、モスリン友禪を出品する拳に出たことである。1915年10月20日と24日の両日にわたって、東京駅および横浜埠頭への1,000名を超える見送り人に謝意を表する旨の挨拶状を、星野錫や山崎亀吉など7名の連名で「朝日新聞」に掲げている。星野錫は日本におけるコロタイプ印刷の創始者で、このとき組織された「桑博観覧協会」の会長を勤めていた。山崎亀吉はK18、K24などの金の品質基準の普及に努め、貴金属業界をリードした銀座一丁目の山崎商会の店主である。いずれ劣らぬ鬱勃たる野心を抱いた起業家たちと肩をならべ、東京実業組合聯合会の役員のひとりとして、晴吉は春洋丸に乗船し、勇躍、海外視察の途に就いたのである²⁸⁾。

「中外商業新報」1917年(大正6)8月20日の「杉之森物語」と銘うたれた記事にも興味をそそられる。欧州大戦で綿糸相場が高騰した機に乗じ、「皆毛斯綸織物商で綿糸とは畠達」ではあるが、「人格資産実力兼備」の、晴吉を含む6名のものが綿糸取引に参入した、とみえるからである。

かいつまんでいえば、日清戦後から第一次世界大戦にかけて、おりからの日本経済の飛躍的な発展を追風に、店主のたくましい商魂を起動力に、松坂晴吉商店は華々しい宣伝を繰り広げたのである。そしてその甲斐あってか、大いに業績を伸ばした模様である。

その一方で、欧州大戦の反動恐慌、震災被害、震災恐慌などの時代の波にもあそばれもする。1935年(昭和10)の『紡績問屋要鑑』²⁹⁾にいうところを摘記すれ

24) 夏目漱石「虞美人草」『朝日新聞』1907.6.23～10.29

25) 山根章弘『羊毛の語る日本史』PHP新書、1983.7

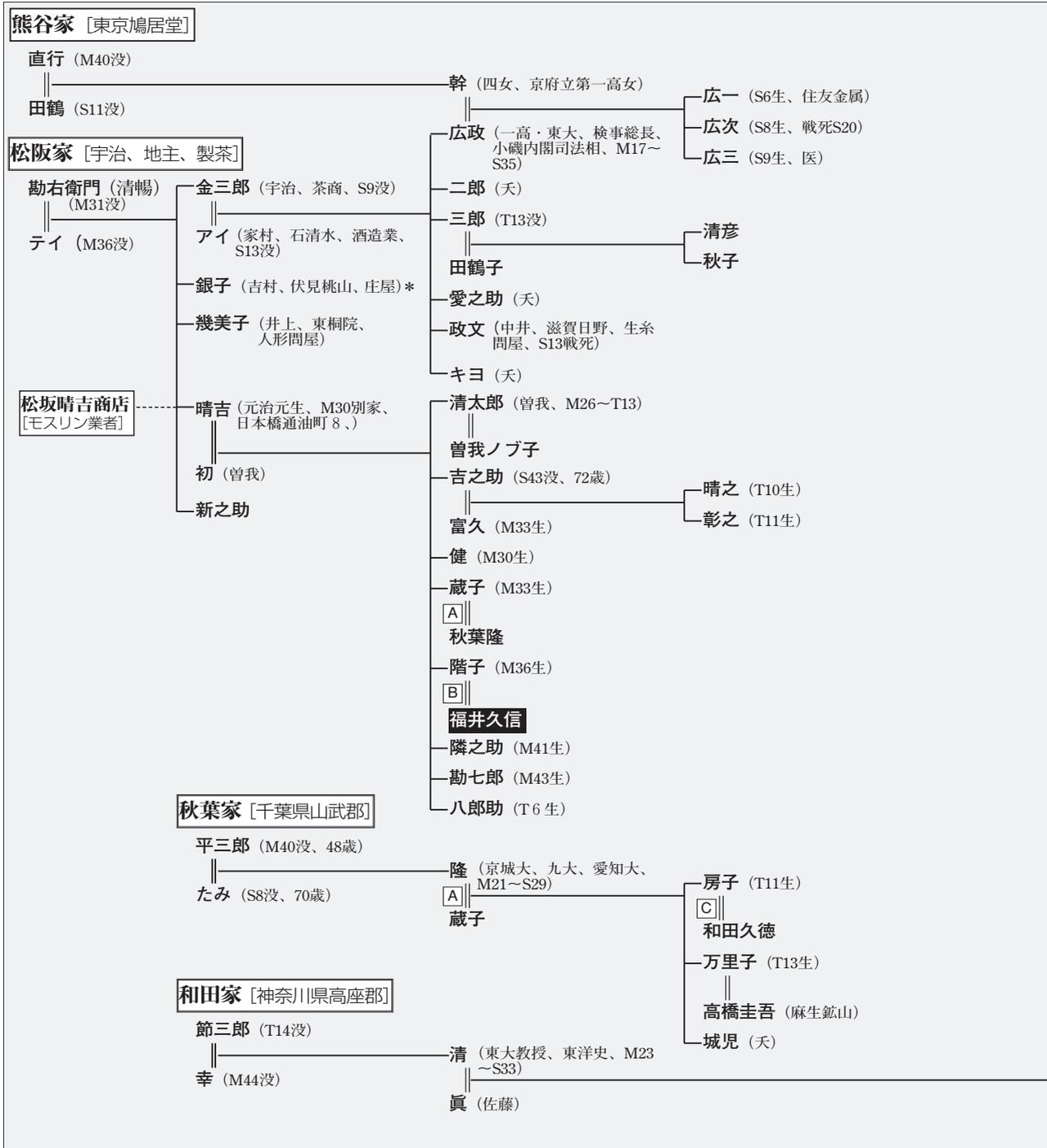
26) 大阪洋反物小売同盟会編『全国モスリン友禪競技大会 第一回・第二回 出品集』芸艸社、1919.11

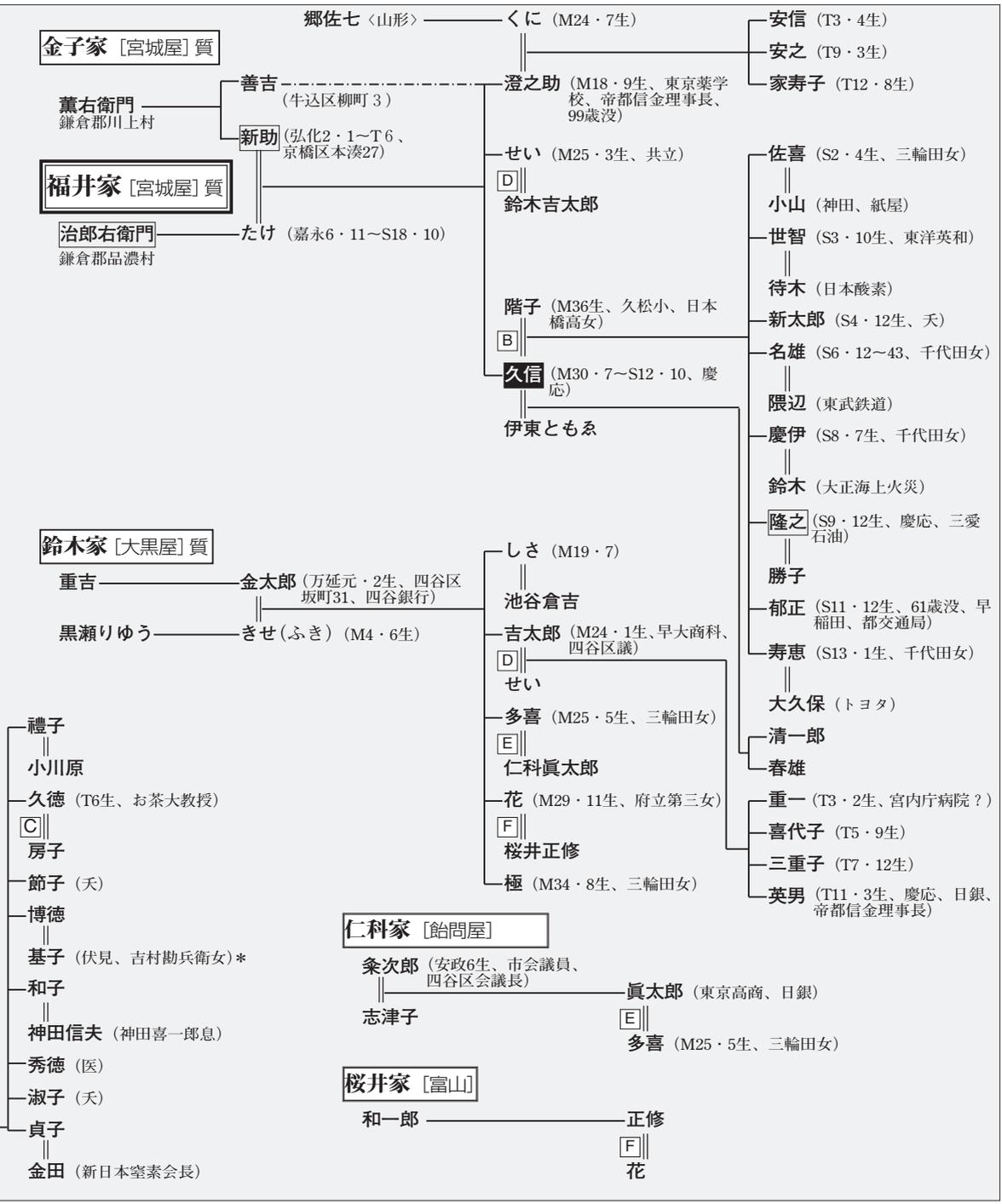
27) 『渋沢栄一伝記資料』第56巻、同刊行会、1964.8

28) 『実連八〇年——歩みと展望』東京実業連合会、1985.8

29) 大沢毅栄『紡績問屋要鑑 昭和十年十月』東京信用交換所、1935.10

図6 福井家とその縁辺の人びとの家系図





ば、松坂晴吉商店は「大正七八年頃まで商勢隆々一方には綿糸仲買を兼営し正味資産百万円と評された」。ところが、「大正九年暴落の後を承け」、「震災に約六拾万円の被害ありて大正十五年二月整理解散」したとある。もっとも、浜町に退転しはしたものの、その後も妻はつ名義で営業を継続している。さらに1934年（昭和9）には、嗣子吉之助が大伝馬町に「（つと）松阪商店」を再興して営業をつづけた。年商25万円とある。中本たか子の『東モス第二工場』³⁰⁾などにみられるように、この時期のモスリン業界は時代の花形産業であった。それだけに、乱高下する景気の好／不況の波をまともにかぶり、ひいては労働争議の標的のひとつともなったのである。

「綿糸仲買」といえば、パリ社交界でバロン・サツマの愛称で親しまれ、藤田嗣治の壁画で知られるパリの日本館を独力で建てた薩摩治郎八³¹⁾の生家や、谷崎潤一郎の妻松子の最初の嫁ぎ先「根津商店」などに代表される太物（綿織物・麻織物）問屋の隆盛と急速な没落を視野に入れれば、松坂晴吉商店の浮き沈みはなおさら理解しやすいようである。それというのも、晴吉の長女蔵子、次女階子がそれぞれに嫁いだのは生家が苦境に陥りはじめたころのことで、谷崎潤一郎の『細雪』の四姉妹の境遇と一脈相通じるものがあるという以上に、驚くほどの相似形をかたちづくっているからである。

蒔岡の家が全盛であつたのはせいぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知つてゐる一部の大阪人の記憶に残つてゐるに過ぎない。いや、もつと正直のことを云へば、全盛と見えた大正の末頃には、生活の上にも営業の上にも放縦であつた父の遣り方が漸く祟つて来て、既に破綻が続出しかけてゐたのであつた。それから間もなく父が死に、営業の整理縮小が行はれ、次いで旧幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るやうになつたが、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の倅をとめてゐた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであつた³²⁾。

『細雪』にいう「生活の上にも営業の上にも放縦であつた父の遣り方」はそっくりそのまま、松坂晴吉の営業戦略に重なり合うようである。

こうした生家の浮き沈みはさておき、晴吉の長女蔵子は1920年（大正9）、21歳のおりに秋葉隆のもとに嫁ぐ。

30) 中本たか子「東モス第二工場」『女人芸術』1932.1～6

31) 獅子文六『但馬太郎治伝』新潮社、1967.11（のち講談社文芸文庫、2000）
村上紀史郎『「バロンサツマ」と呼ばれた男——薩摩治郎八とその時代』藤原書店、2009.2

32) 谷崎潤一郎「細雪」『中央公論』1943.1

秋葉隆（1888～1954）は東大卒業後、ロンドン大学、パリ大学で学び、デュルケムやモース、とりわけマリノフスキーから強い感化をうける。のち、朝鮮・満州・モンゴルの社会民族学研究に携わり、京城帝大教授となった³³⁾。なお、秋葉隆のソウルへの赴任の時期については第1節の「誕生記録」のくだりに触れた。戦後は九州帝大、愛知大学の教授を歴任する。著書に『朝鮮巫俗の研究』³⁴⁾『満蒙の民族と宗教』³⁵⁾『朝鮮民俗誌』³⁶⁾などがある。蔵子とのあいだに生まれた房子は秋葉隆の旧友で、東京帝大および東洋文庫（旧モリソン文庫）教授として東洋史学界の泰斗であった和田清³⁷⁾の子息久徳（お茶の水女子大学教授）に嫁ぎ、中国文学研究者の神田喜一郎の縁辺にもつらなつた。

ちなみに、九十九里浜のある千葉県山武郡の出身で、千葉師範を卒業後、地元の小学校や私立南高輪尋常小学校（森村市左衛門の創設。のちの森村学園）³⁸⁾などで教鞭をとるかたわら、東京高師・東京外語・東京帝大と苦学力行して、のちに大を成すにいたつた秋葉隆と、日本橋の商家の娘だった蔵子との縁組が調うにいたつた経緯については知るところがない。

晴吉の次女階子は1903年（明治36）生まれ。日本橋区立久松小学校、日本橋高等女学校を経て、慶応理財科を卒業した福井久信のもとに嫁ぐ。

見合い写真とは別に、娘時代の階子の近影が残されている〔図7a〕。背後の姿見に、そのころ化粧品業界の雄であるとともに、プラトン社の名義で雑誌「女性」や「苦楽」を発刊し、関東大震災後の出版界をリードしていた中山太陽堂のヒット商品「クラブ洗粉」の文字がみえる。どうやら美容室での撮影とおぼしい。結い立ての洋髪に、大胆なよろけ縞の一越縮緬（？）を着て、帯をふくら雀に結んでいる。いかにも東京日本橋の富裕な商家の娘に似つかわしい身づくろいである。しかしそれにもまして、断髪に洋装とまでは洒落ていないものの、洋髪といい、流行の縞柄の着物といい、震災後に訪れたモダニズム時代の息吹を顕著に反映する、尖端的で「イット」（クララ・ボウ主演映画に由来する流行語）³⁹⁾なファッションを先取りした気配が濃厚である。参考までに、つい先ごろまで歌舞伎座（2010

33) 村武精一「末弟子からみた〈秋葉隆〉像」『社会人類学年報 VOL3』1977

島本彦次郎「故秋葉先生の思い出」『愛知大学新聞』1954.11.15

川越淳二「秋葉博士の思い出」『愛知大学新聞』1954.11.15

島本彦次郎「秋葉隆博士の生涯と業績」『朝鮮学報』9、1956

34) 赤松智松・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』上・下、大阪屋号書店、1937.6、1938.10

35) 赤松智松・秋葉隆『満蒙の民族と宗教』大阪屋号書店、1941.3

36) 秋葉隆『朝鮮民俗誌』六三書院、1954.3

37) 松村潤「和田清」『東洋学の系譜』第2集、大修館書店1994.9

座談会「先学を語る——和田清博士」『東方学』第56輯、1978.7（のち刀水書房、2000）

38) 『新樹——森村学園五十年の歩み』1960.9

『森村学園80年史』1990.5

39) 喜多壮一郎『モダン用語辞典』実業之日本社、1930.11

年取り壊し)の踊り場に飾られていた速水御舟の「花の傍」(1932)を掲げておきたい[図7b]。

1925年(大正14)、階子は福井久信のもとに嫁ぐ。ときに、1897年(明治30)生まれの久信は29歳、階子は23歳(兩人ともに数え歳)である。花嫁23歳という結婚年齢は、当時とすればいささか晩婚である。階子がこの縁組に二の足を踏んだという言い伝えが、子どもたちのあいだに残されている。久信の遺児たちと映った写真でも、瀧縞のお召しに黒の羽織を引っかけた姿は優にあでやかなばかりか、いっそ小粋でさえある[図8]。松阪家の次女には、『細雪』の妙子にも通うお侠で、はねっ返りな一面があったのだらうか⁴⁰⁾。それとも、先に述べた震災にともなう生家松坂晴吉商店の浮き沈みや、のちに触れる久信の女性問題がこの縁談に微妙な影を落したためでもあったらうか。

なお、箆笥・長持・夫婦蒲団・括り枕に舟底枕・対の手焙りと揃いの火箸・晴れ着/町着などの堆い衣裳類・琴・三味線などの嫁入り道具一式のスナップ写真2葉と、帝国ホテルでの挙式を記念した巴写真館謹製の婚礼写真が残されている[図9a-b]。先に述べた松阪広政や秋葉隆が席に列になっているのは、親族だから当然である。次節に触れる久信の兄金子澄之助や義兄鈴木吉太郎(姉せいの夫)の顔もみえる。だが、政友会の大立て者で、首相や蔵相を歴任した高橋是清の子息(是賢・是福のいずれかであろうが、いまにわかには断じがたい)が媒酌人を勤めているのには驚かされる。

久信との足かけ13年の結婚生活のあいだに、階子は三男五女(長男新之助は夭折)を儲ける。1937年(昭和12)12月に久信が享年41歳で急逝したのは、家督をついだ幼主隆之(1934~)の後見して貸地・貸家業に奮闘し、夫の急逝後に生



図7a 娘時代の階子



図7b 速水御舟「花の傍」

40) 注32)に同じ。

まれた五女をはじめとする子女たちの哺育に専念して、戦中・戦後の混乱期を乗り越える。それというのも、1952年（昭和27）の時点で、舅新助から継承され、夫久信が維持した湊一丁目7番地および二丁目5番地をはじめとする京橋区内の地所のほとんどを、女手ひとつで保全しているからである。物価統制令や財産税、預金封鎖、新円切り替えなどの経済変動がつぎつぎと襲いかかった戦中・戦後の混乱と窮乏の時期にめぐりあわせたにもかかわらずである。ことは1912年（明治45）の『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地図並びに地籍台帳——京橋区』⁴¹⁾と1953年（昭和28）刊『東京都土地要覧——中央区』「台帳編」⁴²⁾とを照し合わせれば、たちどころに諒解することができる。



図8 久信の遺族たち（1941年）



図9a 久信・階子婚礼写真（1925年）

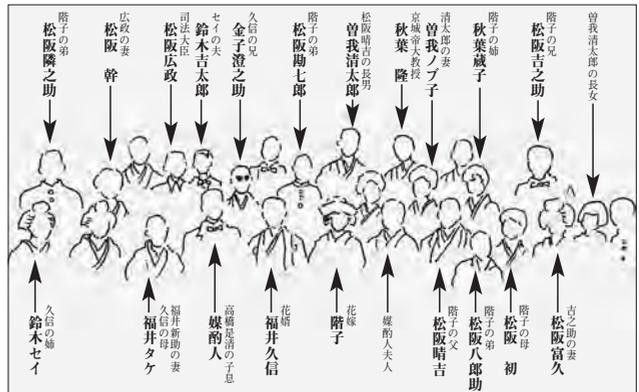


図9b 久信・階子婚礼列席者

41) 『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地図並びに地籍台帳——京橋区』1912（のち『中央区沿革図集——京橋篇』中央区京橋図書館、1996）

42) 『東京都土地要覧——中央区』「台帳編」「地籍図編」「固定資産評価額」不動産調査会、1953.7

階子が没したのは1992年（平成4）1月のことである。享年89歳であった。

3——福井家の人びと——その1. 質商福井新助の蓄財

各種の人名辞典や紳士録の記述をもとに⁴³⁾、福井家の人びとの口碑を参酌することで、福井家三代の祖福井新助のプロフィールを素描しておく。

京橋区本湊町に代々住まった福井家初代の新助は、神奈川県鎌倉郡川上村（現：横浜市戸塚区）の金子氏の出で、1845年（弘化2）生まれ。同郡^{しみの}濃村（1889年の「町村制」の施行によって川上村に併合）の福井治郎右衛門の娘たけのもとに入婿し、「宮城屋」と称して質商を、あわせて貸地・貸家業を営む。1917年（大正6）没。子女に澄之助、せい、久信の二男一女がある。

新助の長子澄之助は新助の生家金子氏を嗣ぎ、せいは鈴木吉太郎に嫁いだ。金子家および鈴木家はそれぞれ牛込区柳町、四谷区坂町に住み、はじめ「宮城屋」「大黒屋」と称して質商を営み、のち、いずれも銀行家となった。渋谷隆一ほか著『日本の質屋』⁴⁴⁾の「関東6府県内質屋業者の銀行・会社役員」なる一覧表に、四谷銀行（1897年創立、資本金20万円）の監査役として、鈴木金太郎（吉太郎の父）の名がみえる。さらに、ずっと後年のことになるが、金子澄之助、鈴木英男（金太郎の孫）がともどもに、帝都信用金庫理事長の職を襲う⁴⁵⁾のはそのためである。

福井・金子・鈴木の三家の当主たちはまた、震災復興期の区画整理委員、町会・方面委員、区会議員などをおのおの歴任し、地元で羽翼を張っている。久信を例にとれば、1934年（昭和9）から肺炎で急逝する37年（昭和12）まで、京橋区議を勤めている。『京橋区史』をはじめとする各区史⁴⁶⁾、東京市役所編纂『東京市町内会の調査』⁴⁷⁾、土屋玉葉の『入船町名誌』⁴⁸⁾、『帝都復興区画整理誌』⁴⁹⁾などのデータによって、それらのことは確認できる。

1943年（昭和18）に福井たけが死去したおりには、祖母たけに代わって幼主隆之を後見する「親族会議補欠選定」申請が京橋区裁に提出されている。ことは寄託文書のなかにみえる。補欠人には松阪吉之助の名が挙げられている。その他の

43) 五十嵐栄吉『大正人名辞典』東洋新報社、1918.12（のち『大正人名辞典Ⅰ』日本図書センター、1987）猪野三郎編『大衆人事録 昭和三年版』帝国秘密探偵社・帝国人事通信社、1927.10（のち『大正人名辞典Ⅱ』日本図書センター、1989）

『大正過去帳：物故人名辞典』東京美術、1973.5

44) 渋谷隆一・鈴木亀二・石山昭次郎『日本の質屋』早稲田大学出版部、1982.6

45) 『東京の信用金庫』東信協25年史編纂委員会、東京都信用金庫協会、1978.5

46) 『京橋区史』上・下巻、京橋区役所、1942.3

『牛込区史』牛込区役所、1930.3

『四谷区史』四谷区役所、1934.3

47) 『東京市町内会の調査』東京市役所、1934.3

48) 土屋玉葉『入船町名誌』玉葉堂、1932.8

49) 注9)に同じ。

メンバーは階子、金子澄之助、鈴木吉太郎である。おりしも階子の姉蔵子は秋葉隆に従ってソウルにいたから、久信亡きあと、未亡人階子と幼少の隆之を盛り立てたこの三家が、福井家にとってはもっとも近い親族だったのであろう。

福井新助の東京進出については、一時期、江戸以来の酒問屋の町・新川で酒業を営んだという口碑が残されている。だが、それを確かめる手がかりとてはない。ちなみに、1845年（弘化2）に生を享けた新助が青少年期を過したのは、ときあたかも幕末・維新期のひとやものや情報がしきりに行き交う横浜—東京間であった。だから、そこには必ずや野心に富み、波瀾に満ちた市井の一青年のドラマがかくされているはずである。

それはさておき、『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地図並びに地籍台帳——京橋区』⁵⁰⁾によって、1912年（明治45）当時、福井新助が京橋区に所有していた地所を一括して掲げておく〔表1〕。公簿面でのこれら地所の評価額の総計は2万2621円である。

福井新助が本湊町28番地の地所および木造瓦葺平家ほか5棟の家屋を9,000円で手に入れた（公簿価格は5,921円。当初は1万円で交渉を開始）のは、地籍台帳の記載に先立つ1910年（明治43）9月のことであった。同じころ、機会あるごとに本湊町27番地にあった第三者名義の家作を少しずつ買い増している。本湊以外の地所や家屋を集約したのも、おおむね1905年（明治38）ごろから1912年（明治45）ごろにかけての、ごく短期間のことと推測される。その間の事情を裏書きする史料のいくつかが寄託文書のなかにあるからである。これは一体、どういうことか。ことからの詳細については、寄託文書の整理を終えたあかつきに、あらためて報告できるはずである。

福井新助の名が交詢社発行の『日本紳士録』⁵¹⁾にみえるのは、1896年（明治29）の

表1 福井新助が京橋区に所有していた地所 （端数四捨五入）

因幡町11番地	55坪	佃島16番地	74坪	佃島46番地	80坪
本湊町27番地	382坪	本湊町28番地	382坪	本八丁堀4番地	83坪
塩町9番地	29坪	南新堀2ノ6	344坪		

※南新堀2ノ7～9には金子澄之助名義の367坪が別にある。

表2 『日本紳士録』にみえる福井新助 （単位：円）

1896年（3版）	所得税	5,000	地租	57,165	京橋区本湊町27
1902年（8版）	貸地貸家業	19			京橋区南新堀2丁目6
1909年（14版）	質商	所得税 320	営業税	78	京橋区本湊町27
1912年（16版）	質商	所得税 258	営業税	61	京橋区本湊町27

50) 注41) に同じ。

51) 『日本紳士録』交詢社、1896、1902、1909、1912年版など。

第三版を^{こうし}嚆矢とする。それ以降の記載のいくつかをアトランダムに拾っておく〔表2〕。なお、地籍台帳や紳士録の記載には、福井新助の現住所は「本湊町27」とあったり、「南新堀町2丁目6」とあったりして、一定しない。こうした居所のゆれは、地所の取得をめぐる裏面の消息でも蔵しているのだろうか。後考をまちたい。

この時期の紳士録への登載の基準は、加藤勘七編『全国所得納税者姓名録』(1898)⁵²⁾の副題「一名代議士選挙の台帳」や、財務協会編『東京市^{議院}選挙人名簿』(1912)⁵³⁾のサブタイトル「一名^{公定}東京紳士録」をみれば早わかりする。1889年(明治22)の「衆議院議員選挙法」にいう「直接国税十五円以上ヲ納メ」るものという点に、目安はあったのである。この税額は1900年(明治33)に10円、19年(大正8)に3円と、漸次引き下げられる。とはいうものの、戸長のうちおおむね2%前後に相当したことはよく知られている。

現に、『東京市^{議院}選挙人名簿』を覗くと、本湊の選挙人はわずか57名にすぎない。一方、1904年(明治37)の『東京市現住戸口表』⁵⁴⁾および1919年(大正8)の『東京市現住戸数及現住人口』⁵⁵⁾によれば、本湊の04年度の総戸数は440戸、男性人口は1,558人とある。19年度の総戸数は967戸、男性人口は1,761人である。そうしたなかにあつて、福井新助や長子金子澄之助、嗣子久信はいずれも、衆議院議員の選挙人資格をもった町内屈指の資産家だったといえることができる。

さらに立ち入って、福井新助の最晩年にあたる1916年(大正5)の資産状況を『東京資産家録(大正五年調査)』⁵⁶⁾によってチェックしておく。本湊町の資産家26名中の第5位にランクされた質商の福井新助は資産15万円、年商2万円以上、納税額756円とある。こうした莫大な資産を、福井新助はどのようにして蓄積することができたのか。知りうる範囲内で書きとめておきたい。

福井新助の名が公記録へ出現するのは日本銀行調査局による『大正貳年七月質屋ニ関スル調査』⁵⁷⁾である。それによれば、「福井新助 京橋区本湊町 兼貸地家 100,000円(資産)」とみえる。なお同書に、当時の民間の質屋は「一ヶ年間ノ貸出高ハ資本ノ約三倍ニ達スルヲ通常トスル」、「取得ハ資本ニ対シ少クトモ年二割五分以上ニ達スル」といった注記がある。同様なことは、東京市社会局の調査をはじめとする各種データ⁵⁸⁾によっても裏づけられる。福井新助の資産は

52) 加藤勘七編『全国所得納税者姓名録——一名代議士選挙の台帳』梅菴書屋、1898.5

53) 『東京市衆議院議員選挙人名簿——一名公定東京紳士録』財務協会、1912.11
『公定東京紳士録』上、財務協会、1915.5

54) 『東京市現住戸口表』東京市、1904.7

55) 『東京市現住戸数及現住人口』東京市役所、1919.8

56) 志田惣三郎『東京資産家録(大正五年調査)』東京実業協会、1916.8

57) 『大正貳年七月 質屋ニ関スル調査』日本銀行調査局、1913.7

58) 『東京市内細民の入質に関する調査』東京市社会局叢書(参)、東京市社会局、1921.3
『質屋業の統計調査』東京市統計課、1926.3

『東京市内及郡部に於ける質屋に関する調査』社会局社会部、1926.11

『大正営業便覧』東京書院、1914.4

『質屋ニ関スル調査』の行われた1913年（大正2）時点で10万円とある。だから、こうした高利回りと、おりからの第一次世界大戦下の好景気とインフレとをバネに、3年後の1916年の『東京資産家録』に15万円とあり、約10年後の1924年（大正13）の『帝国信用録』第17版⁵⁹⁾に、新助没後の久信の資産として40万円とみえるのも、たやすく納得できる。そして、そうした蓄財を元手に、福井家は1910年前後に市内各所の地所を集約し、質商から貸地・貸家業へと転身していったとみても、あながち過ってはいないようである。

4—『江戸名所図会』をしおりに一〈本湊〉という街 その1

福井家の人びとが三代、一世紀にわたって住み慣わしてきた京橋区本湊町（現：中央区湊一丁目）という街については、東京のまんなかに位置しながらも、一般の人びとにはほとんど知られていないのが実情である [図10]。

〈鉄砲洲〉といえば、まだしも通りが良いかも知れない。筆者自身にしてからが、『福翁自伝』⁶⁰⁾に大坂の緒方洪庵の適塾を経て出府した福沢諭吉が最初に旅装を解いたところとあることから、本湊町などの個別の町名に先立って、鉄砲洲の地名をインプットされたものである。ただ、同じ鉄砲洲とはいっても、諭吉の仕えた九州中津の奥平家中屋敷は、現在聖路加病院のある築地明石町一帯であった。だから、広範囲にわたる鉄砲洲地域のもっとも北辺に位置し、阿波徳島25万石の蜂須賀藩の中屋敷の外郭を縁どっていた本湊とはいささか隔たっている。

本八丁堀と南八丁堀のあいだを東に流れる桜川（第一橋梁は稲荷橋。1950～69年埋立）以南の大川沿いの埋立地である本湊町・船松町・十軒町・明石町の町々は本湊町を銃床に、明石町を銃口に、ちょうど鉄砲のかたちをしている [図11]。それゆえ俚俗に〈鉄砲洲〉と呼び慣わされてきたのであ



図10 「京橋区全図」（『新撰東京名所図会』より）

59) 『帝国信用録』第17版、帝国興信所、1924.3

60) 『福翁自伝』『時事新報』1898.7.1～99.2.16（のち岩波文庫、1954）

る。『江戸惣鹿子名所大全』(1751 寛延4)⁶¹⁾に「鉄炮津 南八丁堀より南の方をいふ」とあり、「湊三丁 松船町 本あみ町 十軒町 二丁 あかし町 此所諸職商家入組」とみえるのが、恰好のガイドブックということになる。なお『江戸名所図会』⁶²⁾や、それをふまえた『新撰東京名所図会 京橋区』⁶³⁾『京橋繁昌記——一名京橋区沿革史』⁶⁴⁾『きやうばし』⁶⁵⁾などの明治以降の一連の地誌類には、「寛永の頃井上稲富等大筒の町見を試みし所なり」という、もうひとつの地名由来譚が紹介されている。

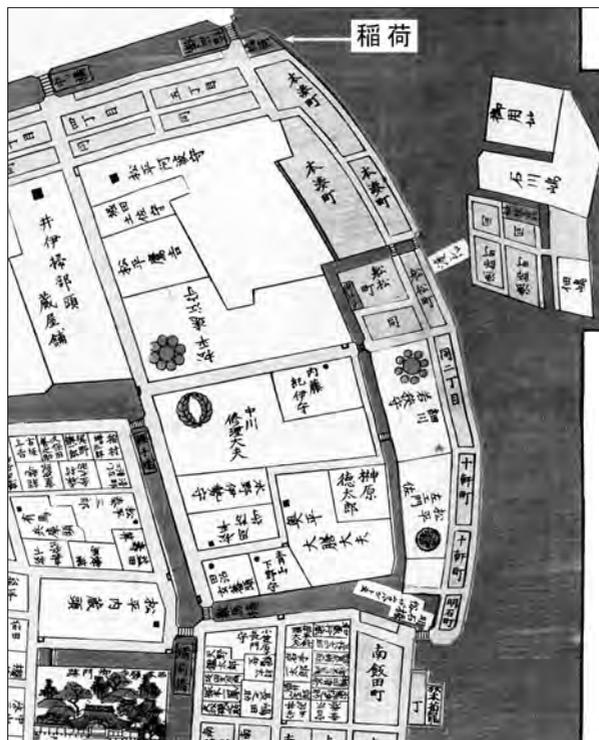


図11 鉄砲洲界限 (文久元年尾張屋板「江戸切絵図」)

散策の道のしおりとして江戸の切絵図がすこぶる便利なことを言挙げしたのは、永井荷風の『日和下駄——一名東京散策記』⁶⁶⁾である。なかでも、斎藤月岑の『江戸名所図会』(1834 天保5、1836 同7)は、江戸の町々のたたずまいを知るには恰好のものである。同書に添えられた長谷川雪旦の挿絵は、これまた写実の妙を尽している。そこで、雪旦の「湊稲荷社」の挿絵によって、本湊の街をスケッチしておきたい [図12]。

画面右奥には安房・上総の山々が遠く描かれている。その左手前には深川の

61) 『江戸惣鹿子名所大全』1751 (寛延4) (花咲一男『再板増補江戸惣鹿子名所大全 (寛延四年板)』渡辺書店、1973)

62) 『江戸名所図会』1834 (天保5)、1836 (同7) (『原寸復刻江戸名所図会』評論社、1996)

63) 『新撰東京名所図会 京橋区』上・中・下『風俗画報』1901.3.15/4.25/8.5

64) 『京橋繁昌記——一名京橋区沿革史』京橋協会、1912.11

65) 澁谷伊助『きやうばし』京橋同気会、1927.5

66) 永井荷風『日和下駄——一名東京散策記』硯山書店、1915.11

町々が、画面中央よりやや上方から右下にかけて隅田川が袈裟懸けに幅を取り、なかに横たわる佃島の北半分が添えられている。画面左端には永代橋が、その下方に越前堀の町々と霊巖島とのあいだを流れる亀島川に架かる高橋、さらに下方には八丁堀を流れる桜川に架かる稲荷橋が捉えられている。後年の資料だが、『東京府志料』⁶⁷⁾に稲荷橋は「本八町堀五丁目ヨリ南八町堀三丁目へ架ス長二十間四尺幅三間」とある。高橋の向う河岸一帯には向井将監の名をとどめた将監河岸に宏大なスペースを占める幕府の御船手組屋敷と船番所が、稲荷橋の南の橋詰（画面下方中央）には橋名の由来となった湊稲荷社が置かれている。

湊稲荷社の境内には〈お富士さん〉が描き込まれている。鉄砲洲富士はかねてから〈二十六夜待〉の月の名所として知られていた。それを反映してか、安藤広重の「鉄砲洲稲荷橋湊神社」（『名所江戸百景』）や「鉄砲洲湊稲荷境内乃不二」（『江戸土産』）をはじめとする錦絵の多くは、河岸にもやう舟や、林立する千石船の檣を大川のなかほどから捉え、その向う側に聳えたつ湊稲荷社の人造富士と、画面奥に本物の富士山とを配置するのを定石とした。そして、こうしたまなざしはとりも直さず、遠い航海を終えてようやく江戸湊へ辿りついた船頭衆が航路を視認する〈山当〉の視線と重なりあうものだったのである。

湊神社をはじめ、銀座一丁目の与作屋敷にあったという。それが、近世期に行

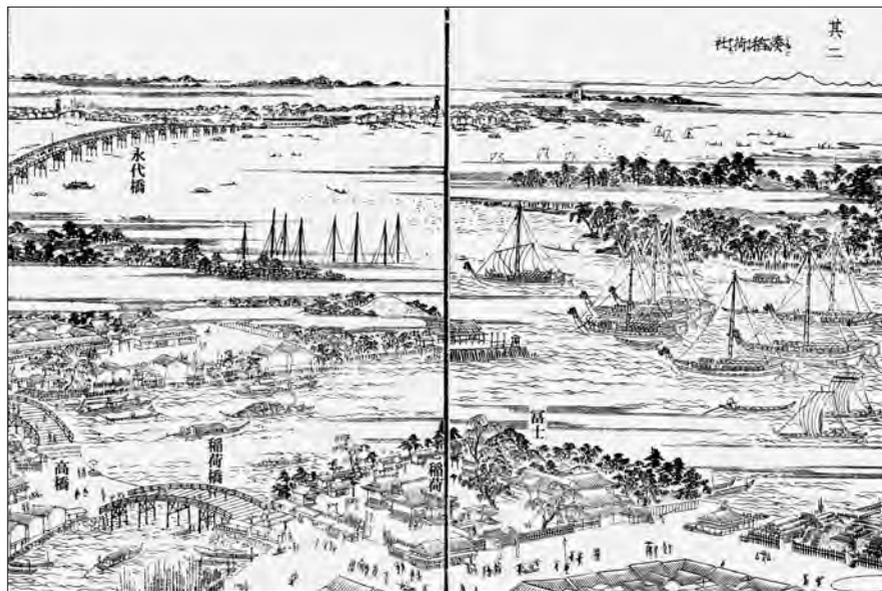


図12 鉄砲洲富士（『江戸名所図会』）

67) 『東京府志料』1874（のち東京都政史料館、1959～61）

われたたび重なる江戸湾の埋立にともなって、南八丁堀、湊河岸^{みなとがし}というように、その都度、大川を臨む地に遷ってきた。ところが、1868年（明治元）8月、湊稲荷社の地は築地居留地の「揚場^{あげば}」として上地されるところとなり、一転、桜川に沿った西南100mの現在地へ移転させられたのである。『新撰東京名所図会』⁶⁸⁾には1869年5月遷座とみえる。「誕生記録」のくだりに触れた福井家の子どもたちが宮参りをし、久信や隆之が祭礼に参加するのは、移転後の鉄砲洲稲荷神社である。ついでに言い添えておけば、鏑木清方の祖母は湊神社の宮司甫喜山氏の出で、明治の文献学者甫喜山景雄は「東京日日新聞」の條野採菊^{さんさんていありんど}（山々亭有人）、すなわち清方の父と友として宜かったようである。

それはともかく、「湊稲荷社」が「鉄砲洲稲荷社」に改称された点に端なくもうかがわれるように、永代橋より下流にあたる大川口のどこからでも見届けることのできた〈お富士さん〉が内陸部に強制移転させられることによって、本湊の街はランドマークを失ったのである。

雪旦の絵に戻ろう。永代橋・高橋・稲荷橋を渡って枳形に屈曲する、画面下方に描かれた道は、やがて築地本願寺の門前に通う。このルートは、本所松坂町の吉良邸で上野介義央の首級を挙げて本懐を遂げた赤穂浪士たちが、高輪泉岳寺へ引き揚げる際にたどった道すじである。道すじの上方には湊河岸の物揚場や棧橋がみえる。下方はトリミングされて麓^{いらか}の稜線しか見えないのが残念である。だがこの家並みこそ、画面手前にあるはずの阿波徳島藩邸の塀外の町屋群で、本稿で取りあげている本湊の街並みである。なお、この挿絵には右側に続きのコマ（「佃島 其一」）があって、本湊に南隣する船松町の河岸地や町屋の様子が、もう少し幅広く取り入れられている。参照されたい。

雪旦の挿絵をふまえて、斎藤月岑の『江戸名所図会』の本文はいう。

此地は廻船入津の湊にして、諸国の商船、普くこゝに運び碇を下して、此社の前にて積む所の品を悉く問屋へ運送す

対岸の将監河岸には幕府の御船手組屋敷や船番所があるから、民間の用は足せない。吃水の深い菱垣廻船や樽廻船などの千石船は、これ以上、内陸部には入りこめない。さいわいにも、湊稲荷社社前の葉研^{やげん}型の入江は風待に適している。しかも、桜川にも亀島川にも通じている。のちのデータだが、『帝都復興区画整理誌』⁶⁹⁾に桜川は「幅員二十一間深度四尺七寸」、亀島川は「幅員二十六間深度五尺」とある。このあたりの堀川の川幅は40~50m、水深はおよそ1.5m前後ということになる。湊稲荷社の社前で舟底の浅い伝馬船や荷足舟に積み替えれば、日

68) 注63) に同じ。

69) 注9) に同じ。

本橋川、京橋川、築地川などをはじめとする諸川への行き来が自在にでき、江戸市中の随所に積荷を届けることができたのである。逆に、石川悌二の『東京の橋』⁷⁰⁾などによれば、亀島川に架かる高橋は舟運の便を図るために橋桁を高くしたのが橋名の由来とある。深川にある高橋^{たかばし}のケースと同様である。それとは別に、船荷を陸揚げし、桁形に屈曲した道すじを辿れば、さきほど述べた陸路^{いんしん}を利用することも可能だったのである。この地が「湊(港)町」として殷賑をきわめたゆえんである。

そうはいっても、各種の江戸図をみればすぐに分かることだが、幕藩体制下にあつて、本湊の大半は蜂須賀藩の中屋敷(9,878坪)によって占有されていた。そればかりではない。明和以前には、池波正太郎の『鬼平犯科帳』ですっかり有名になった長谷川平蔵の拝領屋敷(479坪)もあった。1764年(明和元)に、その屋敷地が隣接する蜂須賀阿波守屋敷に併合され、長谷川氏が本所三の橋通に移ったことは、瀧川政次郎の『長谷川平蔵』⁷¹⁾などにみえる。

こうした1万坪を越える宏大な蜂須賀藩邸の長い塀外を縁^{ふち}どるかたちで、本湊の町屋は大川に臨んだ河岸地とのあいだにベルト状に形成されていったのである。ことは、すでに挙げた『江戸惣鹿子名所大全』⁷²⁾に「湊三丁 松船町 本あみ町 十軒町二丁 あかし町 此所諸職商家入組」とみえ、『^{日本}国花万葉集』⁷³⁾にも「鉄砲洲 湊町三丁、船松町、本あみ町、十間町二丁、あかし町」「此町筋、諸職売物入組」と記述されていることによって確認できる。

本湊に本拠を置いた最初の豪商は、紀文・奈良茂のあとをうけた栖原屋(北村)角兵衛だという。栖原屋角兵衛は紀州有田郡栖原湊(現・和歌山県有田市)の人。はじめ紀州に、のち上総天羽郡荻生湊(現・千葉県富津市)に拠点を置き、元禄のころ、二代目角兵衛が本湊に材木店を開いた。八丁堀の紀州藩蔵屋敷に出入りし、紀州方面の材木の取引に携わったのである。それのみにとどまらず、飛騨屋久兵衛と組み、蝦夷檜や海産物の取引で財を成した。蝦夷物産会所の設立に関与したのはそのためである。ことは『京橋区史』⁷⁴⁾や京橋図書館の『郷土室だより』⁷⁵⁾、さらには『東京材木仲買史』⁷⁶⁾、田島佳也の「北の海に向かった紀州商人——栖原屋角兵衛家の事跡」⁷⁷⁾などの諸書にみえる。のち、他の材木問屋がみなそうであ

70) 石川悌二『東京の橋』新人物往来社、1977.6

『中央区の橋・橋詰広場 中央区文化財調査報告集5』中央区教育委員会、1998.3

71) 瀧川政次郎『長谷川平蔵』朝日新聞社、1982.1

72) 注61)と同じ。

73) 『日本 国花万葉集』1697(元禄10)(のち朝倉治彦『古板地誌叢書』巻3、すみや書房、1970)

74) 注46)と同じ。

75) 東京都中央区立京橋図書館『郷土室だより』1973.6.15～

76) 『東京材木仲買史』東京材木商協同組合、1966.10

77) 田島佳也「北の海に向かった紀州商人——栖原屋角兵衛家の事跡」『海と列島文化Ⅰ 日本海と北国文化』小学館、1990.7

るように、深川木場に本拠地を移す。なお、『江戸買物独案内』（1810 文化7）⁷⁸⁾にみえる「干鰯魚^{ほしか}粕魚油^{しめかす}問屋」の栖原屋（菊池）久治郎なるものも、紀州有田郡栖原村出身の海民である。往来物や武鑑の出版で知られ、本節で取り上げた斎藤月岑の『江戸名所図会』の版元でもあった、江戸有数の書肆問屋須原屋（北島）茂兵衛もまた、同郷人である⁷⁹⁾。郷



図13 「江戸買物独案内」

党を同じうするこの三家はたがいに資金援助をしたり、姻戚関係を重ねたりした模様である。

『江戸買物独案内』といえば、八丈嶋屋与市なるものが御本丸・西御丸御用「本八丈嶋織物類」の取次店を本湊に開いていたことがみえる [図13]。はじめ八丈島の特産品として貢納され、大奥の御殿女中たちの用に供されていた八丈島織は『恋娘昔八丈』（1775 安永4 初演）の白子屋お駒のエピソードを引き合いに出すまでもなく、江戸のなかごろから市中でも大いにもてはやされた。八丈島三根村の与市は、その八丈島織を商ったのである。売捌所として伊豆七島嶋方会所が1796年（寛政8）に同じ鉄砲洲の十軒町に開かれていたから、八丈嶋屋が本湊に店を構えたのもごく自然であった。

八丈嶋屋与市については、『八丈実記』第四編の「島人系譜」に「十一歳ニシテ出島十八歳父之遺命ヲ以商家トナル則本湊ニ住ス」⁸⁰⁾とある。「織物・質・両替ヲ業」としたのである。与市が高橋華陽と名告って、沢田東江の文人グループにいたことは、柏崎順子の「高橋嘉陽」⁸¹⁾に詳しい。また、『諸家人名江戸方角分』⁸²⁾の鉄砲洲の項に「女護嶋 名関慎字正卿 本湊町 高橋与市」とみえるのも、同一人物のことである。

『江戸買物独案内』は、上記の2店を含めて、下り酒屋、下り傘屋など、本湊に暖簾を掲げた大店12軒をあげている。「此所諸職商家入組」、「此町筋、諸職売

78) 『江戸買物独案内』中川芳山堂1824（文化7）（のち、西山松之助『江戸町人の研究』第3巻、吉川弘文館、1974）

79) 今田洋三『江戸の本屋さん』NHKブックス、1977.10

80) 『都史紀要12 江戸時代の八丈島』東京都公文書館、1964.8

大間知篤三『大間知篤三著作集』未来社、1978.2

『八丈実記』第1巻～第7巻、緑地社、1964.11～1976.10

『八丈島史』八丈町教育委員会、1973.3（三訂増補、2000.3）

81) 柏崎順子「高橋嘉陽」一橋大学『言語文化』46、2009.12

中野三敏『近世新崎人伝』毎日新聞社、1977.9

82) 『諸家人名江戸方角分』1818（文政元）

物入組」という本湊の実態がそこにはみえる。『江戸十組問屋便覧』(1813 文化10)⁸³⁾『諸問屋名前帳』(嘉永年間)⁸⁴⁾『両替地名録』(1854 嘉永7)などにも、紀州熊野産の薪炭をあつかう炭問屋や廻船問屋が多くあげられている。それを裏書きするように、1844年(天保15)正月の書上^{かきあげ}には、本湊に住まう廻船問屋10軒、総船数228艘とある。要するに、近世期の本湊は名に示されるとおりの「湊(港)町」であり、栖原屋や八丈嶋屋をはじめとする富裕な商人たちによってにぎわう街並みだったといえるようである。

そうはいっても、これまでみてきたように、本湊の町屋は阿波藩邸と大川に臨んだ河岸地とのあいだの狭隘な地域にベルト状に形成されていた。だから、「市が立つ」ほどのスペースには恵まれていなかったのである。「揚場」としては機能しても、「市」としては成り立たないという地理的条件が、のちのちこの街の性格を決定づけてゆく。しかし、そのことについては次節に譲りたい。

5 — 都心のエア・ポケット— 〈本湊〉という街 その2

本湊を取りまく町々は流行の〈東京散歩もの〉にもうかがわれるように、以前から人びとの注目を浴び、小説やエッセイなどに登場することが多かった。

文明開化のショウ・ウインドウであり、昭和モダニズムの発信地でもあった銀座・京橋や、歌舞伎座・新富座のあった木挽町・新富町、明治以降の致富の町兜町、『与話情浮名横櫛』の玄冶店^{まはなさけうきなよこぐし}や有馬の水天宮で知られる人形町、小山内薫の『大川端』^{おほがわのきり}⁸⁵⁾に描かれた芳町、『明治一代女』⁸⁶⁾の花井お梅の箱丁殺し⁸⁷⁾で名を馳せた浜町河岸などはいまでもない。吉行エイスケの『女百貨店』⁸⁸⁾や谷崎潤一郎の『幼少時代』⁸⁹⁾にみえる日本橋蛸殻町や茅場町。森鷗外の『百物語』⁹⁰⁾が描いた写真大尽鹿島清兵衛とぼん太が住み、幸田文⁹¹⁾の嫁ぎ先「あまほん」などの酒問屋が建ちならんだ新川から越前堀にかけて。岡本かの子の『河明り』⁹²⁾の女主人^{おんなあるじ}の住む将監河岸。岡本綺堂や野村胡堂、池波正太郎に代表される捕物帖のメッカ八丁堀。木下空太郎、北原白秋、三木露風らが詩にうたい、鏑木清方⁹³⁾

83) 『江戸十組問屋便覧』1813(文化10)

84) 『諸問屋名前帳』国立国会図書館、1962.7(のち『旧幕引継書目録』文生書院、2001)

85) 小山内薫『大川端』春陽堂、1913.2

86) 川口松太郎『明治一代女』『オール読物』1935.9~12

87) 拙稿「悪女のゆくえ——一名、情報のアルケオロジ——」『和光大学表現学部・人間関係学部紀要別冊 エスキス』2002.3

88) 吉行エイスケ『女百貨店』『近代生活』1930.2

89) 谷崎潤一郎『幼少時代』中央公論社、1957.3

90) 森鷗外『百物語』『中央公論』1911.10

91) 幸田文『姦声』『思索』1949.6(のち『黒い裾』中央公論社、1955)

青木玉『帰りがかった家』講談社、1997.2

92) 岡本かの子『河明り』創元社、1939.4

93) 鏑木清方『築地明石町』(画)1927、『築地川』(文集)双雅房、1936.12

や川瀬巴水⁹⁴⁾が絵に描き、はては三島由紀夫や芝木好子が『橋づくし』⁹⁵⁾や『築地川』⁹⁶⁾で小説化した居留地の町築地明石町。吉本隆明が出自と重ねて『像としての都市』⁹⁷⁾でスケッチし、四方田犬彦がなかば異邦人として『月島物語』⁹⁸⁾に取りあげた近代工場と労働者たちの佃島・月島（月島については、有名な『月島調査』⁹⁹⁾もある）などなど。本湊を取りまく町々については多くの記述がある。

それに引きかえ、本湊という街は、のちに掲げる永井荷風の随筆や児玉花外の『東京印象記』¹⁰⁰⁾を除いては、ほとんど取り上げられてこなかった。京橋区はおろか鉄砲洲のなかでも、なおざりにされてきた地域である。エア・ポケットといってもよい。東京のまんなかに位置し、物流の面で重要な役割を担ってきたながら、人びとに記述したいという欲望を促すどころか顧みられることさえないといった、こうした事態が生み出されたのはなぜか。その理由を尋ねるとともに、都市を表象することの意味を意識の明るみに引き出す契機を見いだせたら、というのが本節のモチベーションである。

明治以降に、本湊の街を捉えた最初の記述は『東京府志料』¹⁰¹⁾である。

この書には、「山海志」編や「第一大区一小区志」をはじめとする街衢編とならんで、「河渠志」の編目がある。東京市を縦横に貫く川筋および堀割と、そこに就航する船舶とが記述されている。そのなかから、本湊にかかわる「八町堀」および「壺巖橋川筋」の記事をかいつまんで記しておく。

京橋川川筋のうち、桜川が流れる「八町堀」の〔舟筏〕は「廻船一艘 五大力船一艘 伝馬船二十六艘 伝馬造茶船五十艘 茶船二十八艘 荷足船九艘 日除船十五艘 押送船七艘 湯船一艘 小船七艘」とある。亀島川を含む「壺巖橋川筋」のそれは「伝馬船百五十艘 伝馬造茶船六十一艘 茶船五十六艘 荷足船二十五艘 似土船二艘 押送船二艘 漁船六艘 日除船十六艘 罾船三艘 水船四艘 湯船二艘 小船六艘」とある。

なお、「罾船」という見慣れぬ表記がみえるが、^{ちよきぶね}猪牙舟のことだろう。「水船」は飲用水を運んだ舟だが、「湯船」とはセーヌ川の「洗濯船」のようなものでもあったろうか。識者の教示を得たい。

それはさておき、外洋を航行する廻船から、川筋の奥深くまで周航する^{にたりぶね}荷足舟、

94) 川瀬巴水「明石町乃雨後」(画) 1928

95) 三島由紀夫「橋づくし」『文藝春秋』1956.12 (のち文藝春秋新社、1958)

96) 芝木芳子『築地川』講談社、1967.9

97) 吉本隆明『像としての都市』弓立社、1989.9

98) 四方田犬彦『月島物語』集英社、1992.7

四方田犬彦『月島物語ふたたび』工作舎、2007.1

99) 『月島調査』生活古典叢書、光生館、1970.3

100) 児玉花外『東京印象記』金尾文淵堂、1911.8 (のち『文学地誌「東京」叢書』第4巻、大空社、1992)

101) 『東京府志料』1874 (のち東京都政史料館、1959～61)

『東京府志料』にみる明治初期の物産一覧』東京都江戸東京博物館調査報告書第7集、1999.3

小舟まで数え、「霊巖橋川筋」は霊巖島（菟蕪島）を取りまく「河渠」のみならず、新川、稻荷堀などの支川まで含んでいるから、一概にはいえない。それでも500艘近くの舟筏が本湊界隈を往き来していたことが、この記述からは見てとれる。前節の末尾に1844年（天保15）正月の書上^{かきあげ}を引いて述べた廻船問屋10軒、総船数228艘という江戸期の繁華は、勝るとも劣らぬ景況で、明治期になっても続いていたのである。

それにくらべて、「第一大区一小区志」にみえる本湊町の記述はどのようなのか。

本湊町 此地鉄砲洲ト唱フ内ナリ（略）南北凡八町アリト云フ（略）○此町ヨリ佃島ヘノ渡口アリ

〔戸口〕 戸 平民二百五十二戸○寄留二十三戸 内士族七戸平民十六戸 人口 千二十三人 内男五百人女五百二十三人○寄留百六十一人 内男百十一人女五十人

〔車馬〕 車 人力車八輛 荷車五輛 小車四輛

〔物産〕 煉油 製造高七百三十二貫目価金九百十五円 蠟燭 二万八千挺価金二百二十五円 腹掛 二百五十枚価金百十円四銭 股引 百八十具価金百四十一円 足袋 九百五十隻価金百六円八銭 曲ヶ物 九百箇価金二十四円十六銭 重箱 九十組価金九円 三方 三百箇価金七円五十銭

1,200人あまりの稠密^{ちゆうみつ}する人口といい、町内の日用に供される煉油732貫(2,745kg)、蠟燭2万8000挺などの手工業品の製造高といい、高い数値を示している。明治初年の本湊は相応に繁華な街だったのである。

そうではあるが、煉油や蠟燭、曲ヶ物^{まげもの}などの原材料がどこから調達されて来たかについては、ここにはまるで触れられていない。ましてや、500艘近くの船舶によって本湊に陸揚げされたはずの薪炭や金肥（干鰯・メ粕）、八丈島織、木・竹・石材をはじめとするさまざまな物資についても、一向に言い及ぼされるところがない。

『東京府志料』そのものが、もともと東京市の各町内において生産された〔物産〕の多寡をコンセプトにしている。だから、他の地域で生産された物産の流通を担う、本湊のもうひとつの顔立ちは掬^{すく}いとりようがないのである。腹掛・股引・足袋の生産高に、手工業者とならんで、荷役をあつかう沖仲仕、陸送に携わる車力、雑業を担う人足などの人びとが多かった街の様子がかろうじて垣間見られるばかりである。

その上、流通を支える〔車馬〕の項目はあっても（その数値は思いのほか少ない。その理由については後に述べる）、〔船舶〕の項目は切り離されていて、ここにはみ

えない。わずかに「此町ヨリ佃島ヘノ渡口アリ」の注記が、近代の都市がやがて喪失することになる〈水からの回路／水への回路〉といえ言えるぐらいである。のちのち本湊が都心のエア・ポケットになる要因は、はやくもこちらへんに^{はいたい}胚胎していたのであった。

「読売新聞」1889年（明治22）4月24日に「河岸地借用者の難渋」と題して、本湊の住民が東京府庁へ河岸地の借地料の減免を願い出たとの記事がみえる。「河岸地規則」にしたがって、陸揚げされた物資を納める倉庫を土蔵や石蔵に改築した借財もまだ満足に返せないでいる。なのに、いままた借地料の値上げをされたのでは、到底、生業が成り立たないというのである。「我々の借用して居る河岸地ハ辺鄙の場所にて」というのが、哀訴の理由である。請願書の文面通りに^う呑みにはできないにしても、これによってうかがえば、明治20年代はじめに本湊町は人びとから「辺鄙の場所」とみなされていたようである。水辺の地は遠く隔たった外の世界へと開かれた開口部としてあるよりも、都市の広がりをもそこで遮断してしまう境界として見捨てられかけている、といっても同じことである。

永井荷風の『日和下駄——一名東京散策記』¹⁰²⁾中の「水 附渡船」に、つぎの一節がある。この一節が減びゆく〈水からの回路／水への回路〉への挽歌だということは、すぐに分かる。

かく品川の景色の見捨てられてしまつたのに反して、荷船の帆柱と工場の煙筒の叢^{むら}立つた大川口の光景は、折々西洋の漫画に見るやうな一種の趣味に照して、此後とも案外長く或一派の詩人を悦ばす事が出来るかも知れぬ。（略）全く石川島の工場を後にして幾艘となく帆柱を連ねて碇泊するさまざま日本風の荷船や西洋形の帆前船を見れば、何となく特種な詩情が催される。

「大川口」と大づかみにされていて、築地明石町や本湊の町名が記されていないのと、流通する物資はなおざりにされて、詩人の「特種な詩情」へ記述が^{しゅうれん}収斂されているのが残念である。だが、ここに描きとられているのは、まぎれもなく鉄砲洲一帯の景観であり、それに向けられた挽歌である。

児玉花外の『東京印象記』の「永代橋と湊河岸」になると、雑駁ではあるがその分、もう少し立ち入った記述を認めることができる。

名の好い湊河岸は、京橋区に在る。小さい湾^{やう}の如^{ごと}に成つて、左程^{さほど}広くはないが、湊といふ丈^{だけ}、伝馬荷足等の大小船が、常も輻湊して居る。

102) 注66) に同じ。

古朽ちた、老爺の様な、ズ・黒い被布^{おほひ ぼぼしら}、櫓の少い用に立たぬやうな巨船が十艘も、固つて碇泊して居る、無論荷物船だが水上の古強者だ。素人が陸上から廢物と観ても水の上では案外然うでないらしい。

スグ横向ふに、東京湾汽船会社と記るして、倉庫が在り、石炭の炭^{ぎら}が重ねて転がしてある。潮の水は薄^{うす}濁^{にご}く濁つて、ダクダクと流るともなく流れて、兩岸と饒山の船舶とを囓^か嘗^じめてゐる。(略)

湊河岸の渡し、些と離れた水に、一艘荷舟が息む。船頭の山の神らしいが、船縁からバケツで水を汲上げて居る、毛糸の襟巻の小娘が、岸へ架木^{かけぎ}を下駄で渡つて来た。(略)

今^いま、夕陽がパツと薄赤く黄に、湊河岸から前面を広く、倉庫も、向岸も、船といふ舟に悉く、冷い光りを浴せた、——漣がキラキラと湾内に産れた。(略)

房総逗子小田原、三崎の方へ、蒸汽船が出る靈岸島は、近傍だ。魚臭い旅客と荷物は、年中絶えた事がない、汽笛は京橋日本橋の、濁つた空気を顛はせる。

本湊は名前の示すとおり「湊(港)町」だった。もともと鉄砲洲一帯が、伝馬船や荷足舟、舢舨の輻湊する河岸地を備えていた。そのなかにあつて、本湊は桜川および亀島川の二本の堀割が大川へ合流する地点で、「小さい湾の如に成つて」いる。大川を隔てて石川島がある。亀島川および桜川の河口が靈岸島側の将監河岸と本湊側の湊河岸とのあいだに薬研^{やげん}のような入江を作っている点からいっても、将監河岸の突端に東京湾汽船の船着場(1889年創業。幕府の御船手組屋敷の跡地)¹⁰³⁾があることに照してみても、本湊は「湊」としてすこぶる便利だったのである。

だから、『日和下駄』も『東京印象記』も、輻湊する大小の船舶を描き、陸揚げされたさまざまな物資を納める倉庫群を捉え、対岸の近代工場の煙突から立ちのぼる煤煙をスケッチする。あるいは「房総逗子小田原、三崎」方面から出入りする「魚臭い旅客」や、舟で生活する船頭、水主とその家族たち(炊事にいそしむ「山の神」やお洒落をした「小娘」)を描いている。ちなみに川端康成の『伊豆の踊子』¹⁰⁴⁾は、踊子と別れた下田の波止場で、「今度の流行性感冒で奴で倅も嫁も死んぢまつて、三人の孫の手を引いて在所へ戻される婆さんの世話を頼まれた一高生が、靈岸島をめざすところで閉じられている。伊豆伊東の出身者木下杢太郎もまた、帰省の際は東京湾汽船を利用したのであった。ことがらの一斑は『和泉屋染物店』¹⁰⁵⁾に影を落している。

ところで、これまであげた荷風にしろ、花外や川端や杢太郎にしろ、かれらは

103) 『東海汽船80年のあゆみ』1970.4

104) 川端康成「伊豆の踊子」『文芸時代』1926.1~2(のち金星堂、1927)

105) 木下杢太郎「和泉屋染物店」『スバル』1909.3

いずれも都市の遊歩者や通過者にすぎない。ほんの一時にしろ、この町に住んだことのあるものの記述はないものか。山室軍平の『私の青年時代』¹⁰⁶⁾がそれにあたる。

のちに救世軍将校として廃娼運動に身を挺することになる山室は、岡山県吉備郡から上京した数え年14歳の1885年(明治18)に、日給8銭で、本木昌造の興した築地活版所の職工に雇われる。当初は寄宿舎に寝起きするが、ほどなく本湊町の下宿に移った。

鉄砲洲の稲荷に近い、京橋区本湊町の、ある家の二階を借りて、そこに寝起をして居つたのだが、此の家の主人夫婦は八丈島の者で、二階十畳ほどの室を、月五十銭かそこらで、私に貸してくれたのは親切のやうだが、此の室には折々、八丈島から出て来た船乗などが泊るのである。しかもその泊りに来る男は、時々顔が異なるにも拘らず、彼等と一緒に泊る婦人は同じ顔である場合が少くない。不審に思うて居ると、後になつて、此は一種の淫売宿であつた事、又私の泊つて居る同じ室の、屏風一重向ふでは、折々淫売が行はれて居る事等を発見したのは、愛想の尽きた話であつた。

山室軍平は「割床」を食らわされたわけである。昼のあいだ二階座敷を遊ばせておくのはもったいないから、たとえ「月五十銭かそこら」の実入りでも、貸すに越したことはないという主人側の策に出たのだろう。なお、「主人夫婦は八丈島の者で」、泊り客も「八丈島から出て来た船乗など」という記述は注目に値する。

八丈嶋屋与市や栖原屋角兵衛を引きあいに出すまでもなく、本湊は伊豆諸島や八丈島、遠くは紀州などとかかわりの深い港町で、水主や船頭やその家族たちが行き来し、荷揚げ人足が立ち働き、かれらを顧客とする小商人たちが群れ集う街だった。三宅島の「満山の椎の林からは何百俵と無く椎実が出る。秋の頃東京日本橋辺の露店などに、三宅島椎実と立て札をしたものを見掛ける」というのは辻村太郎の「三宅島の話」¹⁰⁷⁾である。そうした際物をあつかう露店商人たちや、蔬菜や日用雑貨を商う振売りも多かった。あるいは、「読売新聞」(1880.10.21)には「今度鉄砲洲本湊へ「山一」といふ炭問屋を開店した井染桑吉ハ有名の相場師で(略)生国紀州熊野より炭を取寄せて広く府下へ売捌き追てハ諸所へ支店を開く見込みだといふ」といった提灯記事が載っている。この街で一山あてようともくろむ山師たちもまた、多く集まってきたのである。したがって、それらの人びと

106) 山室軍平『私の青年時代 一名、従軍するまで』救世軍出版及供給部、1929.11

吉屋信子「とくの声」『読売新聞』1964.11.6～65.4.29

三吉明『山室軍平』吉川弘文館、1971.10

107) 辻村太郎「三宅島の話」『郷土研究』第2巻9号、1914.11

のなかには山室軍平が出くわしたような、けしからぬ商いをする男女も紛れ込んでいたのだろう。

気の荒い船頭衆の多い町のことだから、博奕や喧嘩口論もさかんだった。「読売新聞」1896年9月12日の記事「鉄砲洲の血の雨」が伝えるように、佃島と洲崎遊郭の顔役が博奕のテラ銭をめぐる、本湊の往来で数十名規模の大立ち回りを演ずるような土地がらでもあったのである。

花外の『東京印象記』には「毛糸の襟巻の小娘が、岸へ架木を下駄で渡つて来た」という記述がみえる。東京オリンピック（1964年）のころまで、水上生活者の子どもたちが鉄砲洲小学校に在学していたことは『中央区の昔を語る（三）』¹⁰⁸⁾や『鉄砲洲百年』¹⁰⁹⁾の座談会にうかがわれる。鉄砲洲小学校は各学年に男組、女組、男女組の3クラスがあり、全校の生徒数はおよそ900名だった。そうしたなかであって、各クラスにはおしなべて2～3名的水上生活者の子女がいたという。川端康成の『浅草紅団』¹¹⁰⁾に登場する「船の時公」の仲間が、本湊にもいたということである。「船の時公」は浅草尋常小学校に通っているかれのために、毎朝父親が言問橋に船を着けてくれるのだが、大川を仕事場にしている船が下校時間に都合良く戻ってこれるとは限らない。一晩中、待ちぼうけを食わされる場合も往々にしてある。その結果、時公はいつしか「公園の子供」になってしまったのである。東京府の行った『水上労働者と寄子の生活』『水上生活者の生活現状』¹¹¹⁾などの調査によれば、1930年代の府下の水上生活者は約6,800世帯、1万6000人を超えていた。かれらのうちの相当数が、本湊を拠点のひとつにしていたのである。なお、水上小学校や夜間小学校の濫觴が京橋区にあったことは諸書¹¹²⁾にみえるとおりである。

また、昭和戦前期まで、車力・馬力の多くは川向うの江東区（旧：城東区）砂町に車庫を持っていた。それらの車輛が大挙して、本湊に陸揚げされた物資を「積みに来る訳です。それで、その積んだ荷物をどこかへやって、帰りに自分が

108) 『中央区の昔を語る（三）』中央区教育委員会社会教育課文化財係、1990.12

109) 注7) に同じ。

110) 川端康成『浅草紅団』先進社、1930.12

111) 『水上労働者と寄子の生活』文明協会、1929.5（のち草間八十雄・磯村英一『近代下層民衆生活誌Ⅲ 不良児・水上労働者・寄子』明石書店、1987）

『水上生活者の生活現状』東京府社会課、1933.4（のち『日本近代都市社会調査資料集成2 東京市・府社会調査報告書52』地歴社、1995）

『水上生活者に関する調査』東京市臨時国勢調査部、1936.6（のち『日本近代都市社会調査資料集成2 東京市・府社会調査報告書63』地歴社、1995）

112) 「草の根の教師たち29 東京の中の辺地校 東京都・水上小学校の星野和子先生」『朝日ジャーナル』1965.11.21

『中央区教育百年のあゆみ』中央区教育委員会、1974.3

石井昭示『近代の児童労働と夜間小学校』明石書店、1992.2

水野真知子「水上小学校の子どもと地域の学校」（千葉昌弘・梅村佳代編『地域の教育の歴史』川島書店、2003.5）

馬車の上に乗っていく。(略)自分が乗って帰る姿がこの通りなどにいっぱい」だった。毎朝、道に落ちた馬糞まぐその掃除が大変だった、というのは『中央区の昔を語る (三)』¹¹³⁾の発言である。

だから『鉄砲洲百年』¹¹⁴⁾に、区内の競技会で鉄砲洲小学校が勝つと、近傍の小学生から「鉄砲洲は船頭の子が多いから」「車力の子が多いから」と言われたという。この街へ向けられた賤視のまなざしをうかがわせる証言である。ただし、これらのことがらについては本湊町に多かった薪炭商、印刷所の消長とあわせて、稿をあらためて記述するつもりなので、いまは指摘するにとどめておく。

『東京府志料』¹¹⁵⁾がこの街に住むものの族籍を記して、寄留者の士族7戸を除いて、その大半を平民としているのもうなずける。現に、この街の人口として『東京府志料』は1,213人、『東京市現住戸口表』¹¹⁶⁾および『明治四十一年 東京市市勢調査概数表』¹¹⁷⁾は1904年度、1908年度がそれぞれ2,393人、2,274人と報告している。煉油、蠟燭、曲まが物などの生産に携わる手工業者とは別に、本湊は流通する物資の集散する街だったから、狭い町内には荷役を中心とする肉体労働に従事する人びとが蝟集いしゅうし、あるいは頻繁に出入りしていたのである。書齋に住まう作家や詩人たちの好奇心や想像力からはもっともかけ離れた地域だったといってもよい。本湊に関する記述の少ない理由のひとつがここにある。

問題はそればかりにはとどまらない。たとえば新川が灘の酒だったのに対して、伊豆諸島や八丈島、紀州から本湊へ運び込まれる主な物資は薪炭であった。はやく『江戸惣鹿子名所大全』¹¹⁸⁾の本湊の項に「裏河岸海手炭問屋多し」とみえる。『江戸名所図会』¹¹⁹⁾にも「今は薪・炭・石などの問屋多く住せり」とある。明治期になっても、『新撰東京名所図会』¹²⁰⁾に「余親しく之を検するに。見今尚ほ旧時に異ならず。湊河岸の倉庫は。九分通り炭問屋の所有にて。苞炭アヲの累積するを見る」とある。本湊は備長炭の集散地だったのである。

そのことが近世期のこの地の繁華を約束したことは容易に納得できる。それだけに、明治以降、流通ルートが船便から鉄道輸送に変わるにつれ、さらには燃料そのものが薪炭から石炭・コークス・石油・電気・ガスへと代替されるエネルギー革命が進捗するにつれて、この街は二重三重に時代の流れから置き去りにされる。かてて加えて、治水事業が低水位工法から高水位工法へと転換することによって、悪名高いカミソリ堤防が〈水からの回路／水への回路〉を切断し、とどめ

113) 注108) に同じ。

114) 注7) に同じ。

115) 注101) に同じ。

116) 注54) に同じ。

117) 『明治四十一年 東京市市勢調査概数表』東京市役所、1909.6

118) 注61) に同じ。

119) 注62) に同じ。

120) 注63) に同じ。

を刺したことは、あらためて断るまでもなからう。ことは鈴木理生の『江戸の川 東京の川』¹²¹⁾に詳しい。現に、湊一〜三丁目の大川沿いは、いまでも人の背丈を越す高いコンクリートの堰堤によって、大川へのまなごしを遮られている。

近代になってからの本湊には、河岸沿いに多数の倉庫群はできても、これといった商店も会社、工場も生まれなかった。工場の多くは人家の稠密する本湊を避けて、はじめは向島、本所、深川に、のちには大川を隔てた月島に拠点を置いたからである。そうしたこともあいまって、本湊は江府枢要の湊(港)町から隅田川河口の場末の町へと零落し、徐々にその影を薄くしてゆく。しかし、それらのことらについては稿をあらためて論じたい。

荷風の『町中の月』¹²²⁾は、街並み自体が「立ちつゞく倉庫」群と化して、「泊りの客も多くはないらしい」「わびし気な宿屋」に配するに、「水の上は荷船や運送船の数も知れず」、「それ等の船ごとに舷で焚くコークスの焰が、かすみ渡る夕靄のあひだに、遠く近く閃き動く」水の上を描いて、昭和10年代初頭の水辺のにぎわいを彷彿させる。さきに「読売新聞」1889年(明治22)4月24日の記事を引いて、この街が「辺鄙な場所」に零落しかけていたことを指摘しておいた。しかしここには、街なかのひと気のなさ^{いまわ きわ きらめ}と水の上のにぎわいとが、対照的に描きとられている。近代が忘却した〈水辺〉のくらしの最期の際の燦きとも言えいえる光景である。

わたくしはいつも此時間(冬の日の灯ともしごろ=筆者注)に散歩を兼ねて、日常の必需品を購ひに銀座へ出る。それ故明月を観るため、築地から越前堀あたりまで歩くのも年の中で冬至の前後が最も多いことになるのである。(略)

稲荷橋は八丁堀の流が海に入るところ、鉄砲洲稲荷^{かたはら}の傍にかゝつてゐるので、その名を得たのであらう。その河口は江戸時代から大きな船の碇泊した港で、今日でも東京湾汽船会社の棧橋と、船客の待合所とが設けられ、大嶋行の汽船がこの河筋ではあたりを圧倒するほど偉大な船体と檣と烟突とを空中に聳かしてゐる。道路は汽船の発着する間際を除けば、夜などは人通りがないくらゐで、立ちつゞく倉庫のあひだに、わびし気な宿屋が薄暗い^{あかり}灯を出してゐるばかり。外から見た様子では、泊りの客も多くはないらしい。これに反して、水の上は荷船や運送船の数も知れず、日の暮れかゝるころには、それ等の船ごとに舷で焚くコークスの焰が、かすみ渡る夕靄のあひだに、遠く近く閃き動くさま、名所絵に見る白魚舟の篝火を思起させる。

121) 鈴木理生『江戸の川・東京の川』井上書院、1989.8

122) 永井荷風『町中の月』(「万茶亭の夕(其他二篇)」)『中央公論』1937.1(のち『おもかげ』中央公論社、1938)

6——福井家の人びと——その2. 貸地・借家業者福井久信の敏腕

福井新助が東京市内の各所に土地・家屋を保有していたことは第3節に述べた。本湊町の地権者の推移については『東京六大区沽券絵図』（1873）^{123）}『東京地主細覧』（1873）^{124）}『東京地主案内』（1878）^{125）}『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地区並びに地籍台帳——京橋区』（1912）^{126）}『東京市京橋区地籍台帳』（1932）^{127）}『東京都土地要覧 中央区』（1952）^{128）}を辿ることによって、そのあらましを知ることができる。

いまかりに、『東京地主細覧』と『東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地区並びに地籍台帳——京橋区』とを対照させ、明治年間の本湊町の地権者をラフ・スケッチしておけば[表3]のようになる。これによって、福井新助が本湊町に所有していた地所は、本湊町27番地および28番地の各382坪、計764坪（約2,521m²）だったことが知られる。なお、明治初年代の諸書のうちから『東京地主細覧』を選んだのは、地権者のデータがもっとも詳細に記されているためである。また、明治年間に地番の施しかたに変動があった模様なので、別表は『東京地主細覧』に基づいて作成してある。それに対して、『東京市京橋区地籍台帳』は震災復興事業の一環だった区画整理後のもの、『東京都土地要覧——中央区』は戦後のものである。それ以前のものにくらべて、区画整理を経たために地割や地番に大幅な異同があり、換地も行われたから、にわかに新旧を対比することは難しい。福井久信および隆之名義の地籍だけを欄外に注記しておく。

ところで、[表3]には地籍のみが登録されていて、そこに建てられていたはずの家屋群については知ることができない。さいわいにも久信の筆になる「大正12年分第三種所得税減免申請（控）」（1924.1.31）なるメモが、寄託文書のなかに残されている。震災被害をこうむった「家屋築造物（全焼シタル建物）」の抜書きである。そのうちから本湊27、28番地にかかわる部分を抜粋してみたい。

住居地 京橋区本湊町27番地
現在所 一時避難場所 牛込区早稲田鶴巻町222
職業 貸地貸家業
損害価格 合計283,262円

123) 『東京六大区沽券絵図』東京府地券課、1873.12

124) 杉本尚正編『東京地主細覧』1873.11

125) 山本忠兵衛『東京地主案内』1878.6（のち渋谷隆一編『都道府県別 資産家地主総覧 東京編』日本図書センター、1988）

126) 注41) に同じ。別に、松本貞吉『東京土地宝典 京橋区』金洪社、1909.11

127) 『東京市京橋区地籍台帳』内山模型製図社出版部、1932.4

128) 注42) に同じ。

表3

杉本尚正編『東京地主細覧』1873.12ほか				東京市区調査会『地籍台帳——京橋区』1912.4			
地番	坪数			地番	坪数		
1	195	六小区佐内町五住	山本くら	1	211	神田区多町1-1	川村太平
2	206	第四小五区湯島松住町五住	川島久兵衛	2	209	南八丁堀3-12	中島重雄
3	138	当七住	山崎治兵衛	3	143	本湊町2	秋田半
4	135	久保田喜右衛門相州住出店主	久保田松之助	4	144	神奈川県津久井郡根小屋村	久保田喜右衛門
5	164	杉山半三郎豆州住出店主	真淵三右衛門	5	175	本湊町4	久保田与兵衛
6	243	第四小三区小石川水道町四十一住 千葉県士	佐藤忠義	6	175	本湊町22	広瀬清兵衛
7	346	十四小区新和泉町住	庄司清兵衛	7	358	浅草区三筋町40	小出好次郎
8	103	第五小一区浅草新須賀町五住	中根都調	8	108	南伝馬町3-23	高浜庄三郎
9	197	五小区金吹町一住	中井新右衛門	9	204	日本橋区金吹町1	中井新右衛門
10	123	第五小一区浅草瓦町十七住	青地四郎左衛門	10	130	銀座3-1	辻千代
11	123	当十二住	山口たね	11-1	59	銀座4-16	荒木源次郎
				11-2	66		辻千代
12	173	住	牧山源兵衛	12	186	芝区田村町14	原源次郎
13	223		北浜久兵衛	13	229	本湊町17	秋田太吉
14	99	天野伴蔵甲州住出店主	天野半次郎	14	100		同
15	205	小網町一丁目十四住	浅井久兵衛	15	205		同
16	127	川喜多久太夫沽券代大伝馬町一丁目五住	竹口武兵衛	16	131	津市分部町3	川喜多久太夫
17			牧山源兵衛	17	257	本湊17	秋田太郎兵衛
18	135	第六小四区深川御舟蔵前町廿三住	森清三郎	18	144	深川区御船蔵前町31	森清三郎
19	134	十六同断	竹口武兵衛	19	142		川喜多久太夫
20	99	当十七住	麻生惣兵衛	20	102		秋田半
21	240	当十二住	山口たね	21	233		広瀬清兵衛
22	309	大村彦太郎沽券代六小区通一丁目八住	高谷茂右衛門	(29)	226	深川区門前山本町7	渡辺フサ
23	387	第四小一区南甲賀町十八奈良県士池谷益泰沽券代	山下久兵衛	(28)	382	本湊町27	福井新助
24	394	第十一小一区中之郷村住	大塚五兵衛	(27)	382	南新堀町2-6	福井新助
25	429		北浜久兵衛	(26)	316	浅草区福富町3	安井治兵衛
26	429	第四小六区池之端仲町廿七住	守田治兵衛	(25)	433	日本橋区薬研堀町43	高木与八郎
27	238	永田又二郎沽券代八小区金六町廿住	長谷善七	(24)	235	南新堀1-8	小西孝兵衛
28	482		牧山源兵衛	(23)	472		広瀬清兵衛
29	883	五小区本町三丁目八住	小西九郎兵衛	(22)	874		広瀬清兵衛
30			鉄砲洲稲荷	30			鉄砲洲稲荷

※『東京地主細覧』には坪数の表記がないので、『東京地主案内』を参看した。それ以後地番の変更されたものには()を施した。

『東京市京橋区地籍台帳』内山模型製図社出版部、1932.4				『東京都土地要覧 中央区』不動産調査会、1953.7	
福井久信	坪数	地価	土地賃貸価格	福井隆之	固定資産評価額 (千円未満切り捨て)
湊一丁目7-2	261.05坪	3,487.90円	3,310.15円	同 左	2,459,000円
7-3	65.32坪	1,017.04円	965.21円	〃	615,000円
湊二丁目5-1	263.07坪	3,514.89円	3,335.77円	〃	2,478,000円
5-3	61.59坪	603.24円	572.49円	〃	496,000円
5-4	18.45坪	209.20円	198.53円	〃	175,000円

自己住宅 京橋区本港町27番地		
木造瓦葺二階建及瓦葺主家二階一階		合計71坪
右附属物トシテ物置		9坪
煉瓦造り二階建土蔵二階一階		合計10坪
所得ノ基因タル家屋築造物 (全焼シタル建物)		
京橋区本湊町27	木造瓦葺二階建塗り土蔵	22.50坪
同	木造瓦葺二階建	15.00坪
同	同	41.25坪
同	同	38.00坪
同	木造瓦葺三階建	28.00坪
同	木造トタン葺二階建	42.00坪
同	木造トタン葺平屋建	28.00坪
同	木造トタン葺平屋建	12.00坪
同	木造トタン葺平屋建	28.00坪
同	木造瓦葺二階建	19.00坪
同	木造瓦葺平屋建	10.50坪
同	木造瓦葺平屋建	21.00坪
京橋区本湊町28	木造瓦葺二階建	27.00坪
同	同	45.00坪
同	同	60.00坪
同	木造瓦葺平屋建六戸建一棟長ヤ	67.50坪
同	木造瓦葺平屋建六戸建一棟長ヤ	45.00坪
同	木造瓦葺平屋建六戸建一棟長ヤ	60.00坪
同	木造瓦葺平屋建六戸建一棟長ヤ	60.00坪

この文書からはさまざまなことがうかがわれる。まず被害総額が30万円に^{なんな}垂んとしたというのは、下町方面の大震災の凄まじさを伝える。京橋区の消失面積は86%、罹災戸数2万8500戸、罹災民は13万1000人にのぼった¹²⁹⁾。稲荷橋・高橋の二橋も、このとき「焼燬墜落」したのであった。

ただ、改造社版『関東大震災火災誌』の付図「帝都大震災火災系統地図」¹³⁰⁾などによって火の流れと時刻とを確かめてみると、本湊町に猛火が及んだのは、地震発生ののち18時間を経過した、翌9月2日の午前中のこととおぼしい。こうしたタイム・ラグがあったからこそ、明治・大正のころに福井新助が本湊町28番地の地

129) 『大正 大震災大火災』日本雄弁会講談社編、1923.10

長井修吉『大正震災記』大正震災記録編纂会、1923.11

『写真と地図と記録で見る 関東大震災誌・東京編』千秋社、1987.2

130) 『関東大震災火災誌』付図「帝都大震災火災系統地図」改造社、1924.5

所ならびに木造瓦葺平家ほか5棟の家屋を手に入れたり、機会あるごとに27番地にあった第三者名義の家作を少しずつ買い増したりした経緯をうかがわせる権利書をはじめとする重要書類を持ち出すことができたのである。福井家文書のなかに、第3節に既述したそれらの書類一式が残されているゆえんである。

そうはいっても、福井家も祝融氏の禍は免れず、建坪約90坪(297m²)の自宅は全焼し、家族は牛込区早稲田鶴巻町の貸家(福井家の持家)への避難を余儀なくされている。あわせて、本湊町に保有していた数多くの貸家も烏有に帰したのであった。ひるがえっていえば、震災前の福井家は自宅とは別に、この街だけでも28番地の長屋4棟をはじめとして20棟ちかくの貸家を持っていたことが分かる。「職業 貸地貸家業」とあるのも宜なる哉である。福井新助の蓄財ぶりと、家督を相続した久信の資産家ぶりとをあらためて知ることができる。

それに比べて、震災以前の福井家の借地・借家人たちのくらし向きはどのようであったのか。「大正12年分第三種所得税減免申請(控)」の記述から類推しておきたい。

764坪の福井家の地所には、地主・家主の福井家の90坪の住居が建っていた。それとは別に、通りに面した大は60坪、小は40坪前後の大きな戸建貸家(あわせて5戸。おそらくはいずれも店舗住宅)も軒を並べていた。さらに、地所内には第三者名義の家屋もなにかしかは残されていたはずである。

それらを差し引き、路地・庇合ひやわい・共同水栓・掃き溜め・総後架などの共用スペースを除いた狭い域内に、20坪前後から6坪に足りない狭小住宅をはじめ、6戸建4棟の長屋がびっしりと軒を連ねていたのである。敷地面積764坪(約2,521m²)のところへ、福井家の持分だけでも総建坪数が759.75坪(約2,508m²、容積率99.5%)だったという数値は、稠密の度合いを考える際の一助となるだろう。一世帯あたり3~4人家族とみて、福井家の地所内には約40戸、120~160人内外の住民が暮めきあって暮らしていたことになるからである。そしてこの数字は、『東京市現住戸口表』¹³¹⁾ および『明治四十一年 東京市市勢調査概数表』¹³²⁾ の報告する1904年度、1908年度がそれぞれ2,393人、2,274人という本湊町の町内人口と正確に比例している。ここには、江戸伝来の裏店空間うらだながそっくりそのまま現出していたのである。

なお、共用スペースのうち、総後架については『中央区の昔を語る(三)』¹³³⁾ に、風呂はおろか「便所のある家はよかったんだよ」「いわゆる共同便所が五軒五軒の間に一つある」とみえる。共同水栓や掃き溜めもまた、同じようであったのだろう。東京郵便電信局の「明治二十八年七月調査 東京市京橋区全図——拾五

131) 注54) に同じ。

132) 注117) に同じ。

133) 注108) に同じ。

区之内第三」¹³⁴⁾を覗けば、こうした入り組んだ街の様子を確認することができる〔図14〕。前節に、狭い町内に手工業者や荷役を中心とする肉体労働に従事する人びとが蟻集していた、と述べたゆえんである。そして、こうした狭隘な町内全部が凄まじい大震災火災によって、ひとたまりもなく灰燼に帰したのであった。

「貸地貸家業」の立場からいえば、災難は大震災火災のみにはとどまらなかった。後藤新平によって推し進められた帝都復興事業もまた、難儀なものだったからである。それというのも、区画整理案の策定、施工にいたるまでの長い空白期間をいたず



図14 郵便地図

らに座食しなければならぬことから生ずる損失、区画整理による接収や換地をめぐって生ずるトラブルなどが輻輳し、久信は係争処理に忙殺させられざるをえなかったからである。

福井家の地所は市街地にあったから、もともと所有権やら借地権やらが入り乱れていた。借地人と借家人とが同一人とはかぎらないという、複雑な所有／貸借関係が伏在していたのである。それらの街並みが一挙に焦土と化してしまったとき、相互の権利関係や地境の問題は深刻であった。そればかりにはとどまらない。不法占拠の問題があらたに叢生したのである。借地人や借家人が地主や家主への断りなしに、一夜のうちに、雨後の筍よろしくバラックを建ててしまったからである。そうでもしなければ、借地人や借家人はその日の糧を得る方途がなかったばかりか、雨露を凌ぐことさえできなかった。立場をかえて地主・家主側からいえば、こうした事態は私有権の侵害以外のなにものでもない。寄託文書中には、その種の係争書類が堆く残されている。

久信を見舞ったこうした係争問題を考える上で、『大正大震災火災誌』に収めら

134) 『明治二十八年七月調査 東京市京橋区全図——拾五区之内第三』、東京郵便電信局

135) 穂積重遠「焼跡に於ける借地借家争議の調停」『関東大震災火災誌』所収

れている穂積重遠の報告「焼跡に於ける借地借家争議の調停」¹³⁵⁾が参考になる。もっとも、このときの穂積は「家作を持つて其家賃で食つて居ると云ふのは余り感心した活き方ではない」という立場に立っていた。だから、問題の所在は明示されていても、貸地・貸家業者の窮状を考えるためには、いくつもの留保条件をつけなければならないようである。

そうしたなかにあつて、「第21地区」とナンバリングされたこの地区にも、ようやく区画整理の鍬が入ることになる。第1節に述べたように、久信は委員のひとりとして事業に加わったのである。ちなみに、この地域には明治以降、ほとんど「市区改正」の手が入っ

ていなかった。わずかに『東京市区改正委員会議事録』1893年（明治26）議第182号¹³⁶⁾にいう、本湊・新湊を横断する東西の道路の敷設が行われたばかりであった。「京橋区本湊町ヨリ新湊町ニ至ル等外道路」がそれにあたる。

それに比べて、このたびの区画整理はこれまでに例をみない、大規模かつ本格的なものであった。参考のために『^{復興}区画整理委員会名鑑」¹³⁷⁾によって、この地区の区画整理委員16名の顔ぶれを挙げておこう〔表4〕。前8者は土地所有者、後の8名は借地権者である。

これらの土地の有力者にまじつて、1897年（明治30）生まれの久信は弱冠28歳で、委員のひとりとして諮問に答えることになる。ちなみに『帝都復興区画整理誌』¹³⁸⁾によれば、「第21地区」の区画整理委員会は1925年（大正14）2月18日に初会合を開き、1928年（昭和3）12月8日に最後の答申を終えている。なお、これ以後の記述は特に断らないかぎり、『帝都復興区画整理誌』による。

「第21地区」に施された区画整理のあらましについては〔図15a-b〕を参照されたい。

街路については「中ノ橋より新設開国橋を経て築地方面に至る幅員三十三米の街路」が「幹線第5号線」としてあらたに敷設される。それ以外にも、何本もの

表4 区画整理委員16名

土地所有者	
前原栄次郎	豊商、東京、十代目
朝倉豊吉	旅館春木屋、埼玉、養子
織田清吉	材木・紀州炭商、東京
広瀬助三	地主、埼玉、養子
秋田豊蔵	木炭問屋熊儀、東京
山脇善五郎	地主、東京、酒問屋
福井久信	地主、家主
佐藤平助	海運業大三商店、宮城
借地権者	
山田善之助	弁護士、大阪
芳賀喬一	弁護士、青森
後藤亮之助	弁護士、三重
岡田仙太郎	船具商、東京
諸田金弥	土地評価鑑定、東京
今村勇蔵	木炭商、東京
沢田光吉	薪炭問屋、静岡
鯉沼源作	米穀商、群馬

136) 『東京市区改正委員会議事録』第6巻、1893

137) 注11) に同じ。

138) 注9) に同じ。

補助線街路が敷設・拡幅された。[図15b]で黒く塗抹された箇所がそれにあたる。本湊の街には、とりわけ福井家の所有地にかかわっては、かねてからあった稲荷橋を渡って鉄砲洲稲荷神社にぶつかり、柵形に屈曲していた街路はそのまま残された。第4節で長谷川雪旦の挿絵をしおりに、赤穂浪士たちを引きあいに述べた道すじである。それとは別に、あらたに「稲荷橋より地区の東部を南下」する幅員15mの「補助線第25号線」が福井家の所有地のまんなかを袈裟懸けに過ぎることになった。これにともなって鉄砲洲稲荷神社がやや西に移動するとともに、25号線を隔てた西側の旧新湊町に鉄砲洲小公園¹³⁹⁾、鉄砲洲小学校¹⁴⁰⁾が建設されることとなった。第1節にスケッチした福井家の現況は、こうした区画整理のおもかげをそっくりそのまま、80数年後の今日までとどめるものだったのである。

こうした区画整理によって、本湊の街並みは面目を一新する。その結果、本湊町界隈の宅地面積は、整理前の1万2724坪から9,993坪と、0.215の減歩率となった。それに引きかえ、『東京市京橋区地籍台帳』(1932)によって確認される湊一丁目および二丁目(換地)に久信が取得した地所の総計は670坪(約2,210m²)である。福井新助が本湊町27、28番地に保有していた地所が764坪(約2,521m²)であったことはたびたび述べてきた。したがって、減歩率は0.123にとどまる。減歩率は周辺住民のその半分に抑えられ、ほぼ70坪ほど利鞘^{りざや}を稼いだ勘定になる。そのみにはとどまらない。湊一丁目および二丁目に確保された福井家の地所はどちらも、あらたに南北に通じた「補助線第25号線」と、東西に走る「区画整理街路」の交叉する角地にあることがみてとれる。久信は多大の便宜供与を得ている。区画整理委員会のなかにあって、お手盛りも含めて、巧妙に立ち回った成果だろう。その証拠には、久信はこののちも貸地・貸家業を順調に維持するばかりか、むしろ大々的に展開していった気配が濃厚だからである。ことがらの一斑は、東横線綱島温泉駅近くの山林約1.5ヘクタールを1万7500円で取得したにかかわって、すでに述べた。

ただ、ことは福井久信という一個人の利害の問題にはとどまらない。福井久信が区画整理事業にどのようにコミットし、あるいは自己の権益を守るためにいかに画策したかのディテールを明らかにすることができれば、後藤新平に代表される「官」によって推進された震災復興事業と、それに拮抗する「民」の震災復興とのあいだに生じた軋轢を究明する一助ともなりうると思われるからである。法令や条例を繰り出して断行される都市の再開発のもとで、その街に生きる市民自身の手による〈街づくり〉のアメニティを考える端緒がここにはある。寄託文書のさらなる詳細な整理・分析を期するゆえんである。

ちなみに、福井久信が肺炎をこじらせて急逝したのは1937年(昭和12)12月のことであった。京橋税務署長名による「相続税課税決定通知書」(1938.8.10付)に

139) 注8)に同じ。

140) 注9)に同じ。

第21地区（整理前）

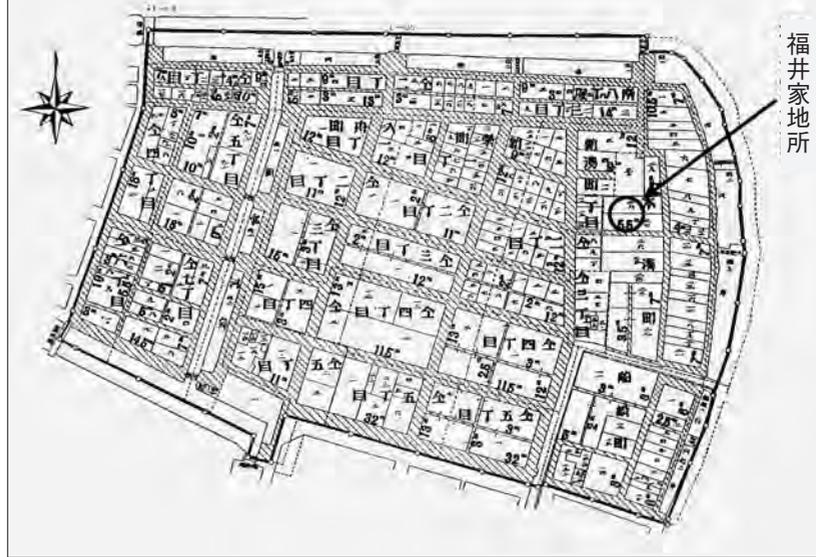


図15a 『帝都復興区画整理誌』付図による。

第21地区（整理後）

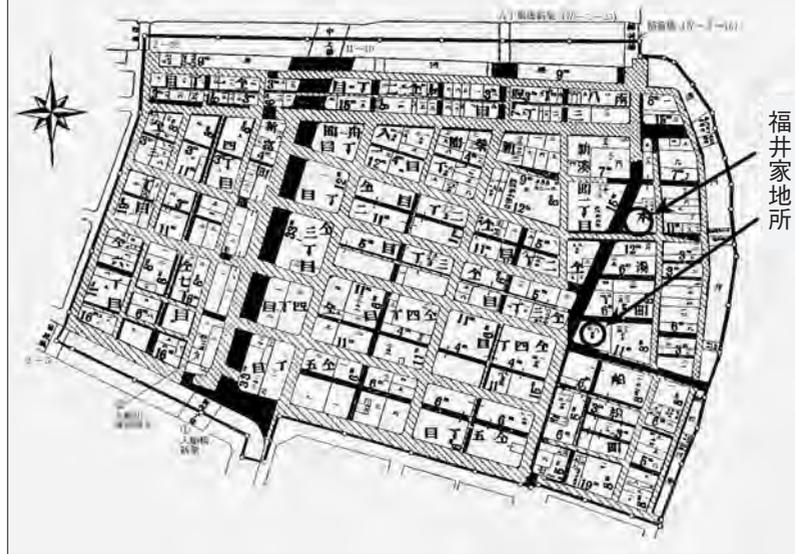


図15b 同上

よれば、久信の遺産総額は52万円、課税額は2万円とある。

——結びにかえて——去り状のこと

整理途中の福井家文書の山を横目に睨みながら、ここまで述べてきた。そもそも鉄砲洲・本湊町という街自体が、ほとんど話題にのぼることのなかった街である。その上、時期的にも1910～60年代と広汎で、震災復興および戦災復興をふたつの分岐点として、住民たちの意識や生活の変化もいちじるしく、問題は多岐にわたっている。そればかりか、貸地・貸家業そのものが都市の重畳した権利関係の影響をこうむって、さまざまに輻輳した問題を抱えていることもあった。そして、何よりも筆者の力量不足が与^{あずか}って、明らかにしえたことがらはわずかで、残された課題のみが山積しているというていたらくである。他日を期したい。

しかし、ここでは積み残された課題の整理はあえてしないでおう。代わって、「東京一市民のくらしと文化」という大枠のなかで考えるとしながらも、いたずらに狗肉を売る結果になるのを懼^{おそ}れ、久信の女性関係について、知り得たことを述べておく。

それというのも、階子については娘時代のファッションをめぐって、震災後の女性文化の変化に言及した。階子の父松阪晴吉にかかわっても、主として営業戦略という側面からではあるが、博覧会や新聞といったメディアをかれがいかにか活用したかについて論じてみた。にもかかわらず、福井新助・久信父子については、質商、貸地・貸家業の展開をあとづけるのに忙殺され、わずかに「誕生記録」や綱島の別荘地に言及するにとどまったからである。念のために断っておけば、黒岩涙香が「万朝報」で繰り広げたスキャンダル・キャンペーン『^{弊風}蓄妾の実例』¹⁴¹⁾のように、久信の行状を性急に指弾するつもりはない。単に、福井家文書のなか久信の女性関係をうかがわせる史料が一束あった、というばかりである。

久信には結婚前から高円寺に囲っていた女性があった。『次郎長三国志』で名高い森の石松を出した三州周智郡（現・静岡県袋井市）出身の伊東とも糸という女性である。清一郎、春雄と名づけられたふたりの男児もいた。1928年（昭和3）11月6日、弁護士立ち合いのもとに、父親とのあいだに正式の示談が成立し、手切れ金2,500円を支払っている。ちなみに、相手側の当初の要求は5,000円だった。それに対して、久信側は子どもひとりにつき1,000円ずつの養育料、当人に500円の慰謝料を支払ったのである。

当時の2,500円は少ない金額ではない。家一軒を建てるには十分すぎるほどの

141) 黒岩涙香「弊風一斑 蓄妾の実例」『万朝報』1898.7.7～9.27（のち社会思想社、現代教養文庫、1992）

金額である。現に、前田一『サラリマン物語』¹⁴²⁾によれば、三井物産に入社したての帝大出の初任給が80円、甲種商業学校の出身者が40円とある。念のために言い添えておけば、かれらは「都市新中間層」と呼ばれた階層に属していたから、これらの初任給でさえ、通常の勤労者とくらべれば破格のサラリーなのであった。それを裏書きする資料もある。やや後年のデータ（1935年度）になるが、安藤政吉『最低賃金の基礎的研究』¹⁴³⁾には尋常小学校の男性正教員の平均俸給額が69円15銭、女性正教員は48円83銭、巡査は49円89銭とある。高額の手切れ金を支払わされて、久信はちょっと忌々し^{いまいま}そうである。

示談にかかわる「覚書」「受取証」をはじめとする書類一式のなかには、ともゑと別の男性とのあいだに取り交わされた、1924年（大正13）12月付の「今日限り関係ハ一切無之候 依 後日ノ為 如 件」と走り書きされた念書も保管されていた。久信の世話になるにあたって、伊東ともゑはそれ以前にかかわりのあった男との仲を清算させられたものとおぼしい。男が養父のような立場のものだったのか、深間とか悪足とか呼ぶにふさわしいあいだ柄であったのか。その間のいきさつについてはにわかには判じがたい。なお、「中元の印として粗品二反当市三越呉服店をして発送致させ」た旨の父親あての書簡（1925.7.13付）の下書きも残されている。さらには、女性の兄と久信とのあいだにも金銭の貸借関係のあったことが「覚書」の但書きからうかがわれる。

これら一連の文書のなかでもとりわけ注目されるのは、「顛末」と題された久信自筆のメモである。なかに「其後ノ顛末ハ日記ニテ尽スニ依リ略ス」とあるから、久信は日記も記していた模様である。久信の筆まめな性格はここにも現れている。そこで、寄託文書のなかに日記らしきものを探したが、目下のところ、見いだすことができないでいる。

それはさておき、「永代橋藤屋製」の罫紙に毛筆で清書されたメモは、別れ話のもちあがった9月以降の交渉から書き起されている。女性の父親が介入するに及んで、どうやら話がこじれたらしい。「男子決シテ女々シキ事申サズ」「父ノ申ス通り、ともゑトノ縁モ切ルベシ子供トノ縁モキルベシ」といったくだりがみえるからである。とりわけ「拙者、女、子供、金ヲ取ラレ実ニ馬鹿^マシキ事ナリ」といった文言から推し量るに、女性の向う側に深間とか悪足とかいった男の影をみるよりも、娘を金蔓としかみなさない父兄の存在こそが悪因だったように読めるのである。慶応出身の坊ちゃんは、幸田文の『流れる』¹⁴⁴⁾で強請^{ゆすり}にきた鋸山の叔父を連想させる、したたかな父兄にことあるごとに金品をまきあげられ、手もなくあしらわれたのかも知れない。だからこそ、離別にあたってはあいだに弁護士も立て、後日の証拠に「顛末」の一文を残したのでもあろう。

142) 前田一『サラリマン物語』東洋経済出版部、1928.3

143) 安藤政吉『最低賃金の基礎的研究』ダイヤモンド社、1941.1

144) 幸田文『流れる』『新潮』1955.1～12

「顛末」は「終リニ臨ンデとも糸氏ニ丈夫デ暮スヨ、以后ハ絶体他人タル事、申スニ、私も其れは承知にして決して厄介ニハナラヌト」といった双方のやりとりで閉じられている。新派悲劇もどきのこの別れ話には、妾や庶子を遇する昭和戦前期の都市中間層の男性の意識がほのみえる。一方で、そうした男性に切り口上で応対する女性の前歴や境涯も多くの示唆に富んでいて、これまた、なかなか興味深い。それというのも、手切れ金は父親に渡されている。兄は兄で、久信から金銭を借用している。不甲斐ない係累の多さゆえに、苦難に満ちた人生行路に呻吟せざるをえない昭和戦前期の女性の身の上が見えてくるからである。

女性が鉄砲洲からはアクセスの悪い中央線沿線の高円寺に囲われていたことから推して、ふたりの関係は久信が震災で本宅を焼け出され、早稲田鶴巻町の持家に仮住まいしていたころに始まり、本宅の普請が完成し、鉄砲洲に引き上げるに及んで解消された、とみるのが自然である。こうした推測が当を得ているとすれば、この女性は震災後の発展いちじるしい新宿武蔵野館あたりのカフェの女給でもしていたのだろうか。それとも、早稲田鶴巻町からほど近い牛込神楽坂、四谷荒木町、津の守などの芸者でもあったのだろうかなどと、憶測を逞しくしてみることのできるのである。

ちなみに、伸びゆく新宿の消息については、今和次郎の『新版大東京案内』¹⁴⁵⁾などに詳しい。神楽坂花街は「寅毘沙」で有名な「毘沙門祠後」にあった。明治の神楽坂花柳界については、尾崎紅葉がもよりの牛込区横寺町に住み、泉鏡花の妻すゝが神楽坂芸者だったゆかりもあって、硯友社文学にしばしばその姿を見せる。くだって、大正・昭和戦前期のこの地については、さきに帝国技芸新報社の『当世芸妓鏡』¹⁴⁶⁾第一編があり、のちに『牛込華街読本』¹⁴⁷⁾がある。震災直後の神楽坂花街の繁昌ぶりについては、『大東京繁昌記 山手篇』¹⁴⁸⁾におさめられた加能作次郎の「早稲田神楽坂」および前出の『新版大東京案内』などが詳しい。地の利もあずかって、早稲田系の人びとの出入りすることが多かったためである。

大震災の被害をこうむることの少なかった神楽坂の芸妓は「六百名から一躍千名に増加し」、「一日に五六名づゝ、お披露目の無い日はない」と克明にレポートしているのは松川二郎の「新東京花街鳥瞰」¹⁴⁹⁾であった。なお、松川二郎には『全国花街めぐり』¹⁵⁰⁾『三都花街めぐり』¹⁵¹⁾の著もある。『わが荷風』¹⁵²⁾の著者

145) 今和次郎『新版大東京案内』中央公論社、1929.12

芳賀善次郎『新宿の今昔』紀伊國屋書店、1970.9

野村敏雄『新宿うら町おもてまち』朝日新聞社、1993.10

一瀬幸三編『新宿遊郭史』新宿郷土会、1983.10

146) 『当世芸妓鏡』第一編、帝国技芸新報社、1913.9

147) 『牛込華街読本』牛込三業会、1937.11

148) 『大東京繁昌記 山手篇』東京日日新聞社、1928.12

149) 松川二郎「新東京花街鳥瞰」『中央公論』1924.1

150) 松川二郎『全国花街めぐり』誠文社、1929.6

151) 松川二郎『三都花街めぐり』誠文社、1932.11

野口富士男は、生母が神楽坂の芸者であったこともあって、『かくてありけり』¹⁵³⁾『私のなかの東京』¹⁵⁴⁾などに神楽坂に触れるところが多い。

しかし、震災後の牛込神楽坂、四谷荒木町、津の守などの芸者の生態を活写したのものとしては、永井荷風の『つゆのあとさき』¹⁵⁵⁾の右に出るものはない。ちなみに、そのあらましについては拙稿「モダニズムの倒像——『つゆのあとさき』の風俗を読む」¹⁵⁶⁾に論じたことがある。ひところ「山の手銀座」とよばれた神楽坂は、震災の被害をこうむることが少なかった。おかげで、この地の花柳界は復興景気に沸きたったのである。「地下足袋をはいたお客さま」(『かし間の女』)¹⁵⁷⁾がさかんに出入りしたのもそのためである。枕席専門の^{みずてん}不見転芸者の^{ばっこ}跋扈する関東大震災後の山の手三業地を、荷風はもののみごとくに描きとっている。『断腸亭日乗』の記事とあわせてみられたい。

その上で、荷風のいう「地下足袋をはいたお客さま」のひとりに、震災被害に遭った市内各所の貸地・貸家のあいだを東奔西走する久信氏がいた、と想像を逞しくしてみるのも楽しかろう。むろん、「地下足袋をはいたお客さま」とは復興景気に沸く請負師や土建業者を指しているから、都市中間層の福井久信はその仲間には入らない。そうではあるが、^{ヘルメット}探検帽とゲートルに身をやつした罹災直後の谷崎潤一郎のポートレートを私たちは知っている。青年客気の久信が同様のいでたちで焼跡を跋涉し、その足で「地下足袋をはいたお客さま」との商談のために神楽坂界隈の花柳界に出没したと考えるても不思議はないのである。

付記：本稿を草するにあたって、和光大学総合文化研究所に家蔵文書を寄託して下さった福井隆之・勝子ご夫妻、橋渡しいただいたばかりか写真史料等をお示し下さった鈴木慶伊さん、文献探索に取り組んでいただいた瀧桂子さん、データベース化を進めて下さっている荒垣恒明・鈴木努・寺島宏貴・鈴木翼のみなさんをはじめ、多くの方がたのご協力をえた。とりわけ、鈴木慶伊さんとの縁から福井家文書との出会いの機会を設けて下さったのみならず、疑念にぶつかるたびごとに、鈴木慶伊さんとのなかだちに労を惜しまれなかった石澤のり子さんにお礼を申し上げる。(2010.12.8稿)

[しおざき ふみお]

152) 野口富士男『わが荷風』集英社、1975.5 (のち中公文庫1984、講談社文芸文庫2002)

153) 野口富士男『かくてありけり』講談社、1978.2 (のち講談社文芸文庫1992)

154) 野口富士男『私のなかの東京』文藝春秋社、1978.6 (のち中公文庫1989、岩波現代文庫2007)

155) 永井荷風『つゆのあとさき』『中央公論』1931.10 (のち中央公論社、1931.11)

156) 拙稿「モダニズムの倒像——『つゆのあとさき』の風俗を読む」『和光大学人文学部紀要別冊エスキス92』1992.6 (のち田口律男編『都市』有精堂、1995)

157) 永井荷風『かし間の女』『苦楽』1926.7、『中央公論』1927.7 (のち中央公論社『つゆのあとさき』所収)